

東関東自動車道(木更津・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 1

－君津市練木遺跡－

平成15年3月

日本道路公団
財団法人 千葉県文化財センター

東関東自動車道(木更津・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 1

— 君津市練木遺跡 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第460集として、日本道路公団の東関東自動車道（木更津・富津線）建設事業に伴って実施した君津市練木遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代の遺物や遺構が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年3月25日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 清水新次

凡　　例

- 1 本書は、日本道路公団による東関東自動車道（木更津・富津線）建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県君津市練木字基445-25ほかに所在する練木遺跡（遺跡コード225-018）である。
- 3 発掘調査から報告書に至る業務は、日本道路公団の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は第1・2章の一部を主席研究員 高橋博文、第1・2章の一部および第3章を上席研究員田島 新が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化財課、日本道路公団、君津市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第4図 君津市役所発行 1/2,500君津市地形図「F-4」・「F-5」
 - 第5図 国土地理院発行 1/25,000地形図「木更津」(NI-54-25-4-2)
 - 第5図 国土地理院発行 1/25,000地形図「鹿野山」(NI-54-26-1-1)
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。測量値については日本測地系を使用した。
- 10 本文および挿図に使用したスクリーントーンの用例は、次のとおりである。



炉跡

本文目次

序文

凡例

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査の方法.....	1
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	5
1 遺跡の位置.....	5
2 周辺の遺跡.....	5
第2章 検出した遺構と遺物.....	9
第1節 縄文時代.....	9
1 概要.....	9
2 遺構・遺物.....	9
3 遺構出土遺物.....	31
第2節 奈良時代以降.....	49
1 概要.....	49
2 遺構・遺物.....	49
第3章 まとめ.....	60
第1節 縄文時代.....	60
第2節 奈良時代以降.....	60
報告書抄録.....	卷末

挿 図 目 次

第1図 上層確認トレンチ配置図(1/1,000) …… 2	第32図 SK013	25
第2図 下層確認グリッド配置図(1/1,000)と 基本土層	第33図 SK013出土土器	26
第3図 練木遺跡全体図(1/1,000)	第34図 SK013出土石器	27
第4図 練木遺跡周辺地形図(1/5,000)	第35図 SK004・005・007・010・012・003, SH121	28
第5図 練木遺跡の位置と周辺の遺跡	第36図 ピット群分布状況	29
第6図 縄文時代遺構・土器・石器分布状況	第37図 土坑・ピット群出土土器	31
第7図 SI002	第38図 ピット群出土石器	31
第8図 SI002出土土器	第39図 石礫製作跡1群出土石器(1)	32
第9図 SI002出土石器	第40図 石礫製作跡1群出土石器(2)	33
第10図 SI003	第41図 石礫製作跡2群出土石器	33
第11図 SI003出土土器	第42図 石礫製作跡3群出土石器	34
第12図 SI003出土石器	第43図 石礫製作跡4群出土石器(1)	34
第13図 SI004	第44図 石礫製作跡4群出土石器(2)	35
第14図 SI004出土土器	第45図 グリッド出土土器(1)	36
第15図 SI004出土石器	第46図 グリッド出土土器(2)	37
第16図 SI006	第47図 グリッド出土土器(3)	38
第17図 SI006出土土器	第48図 グリッド出土土器(4)	39
第18図 SI007	第49図 グリッド出土土器(5)	40
第19図 SI009	第50図 グリッド出土土器(6)	41
第20図 SI009出土土器・土製品	第51図 グリッド出土土器(7)	42
第21図 SI009出土石器	第52図 グリッド出土土器(8)	43
第22図 SI010	第53図 グリッド出土土器(9)	44
第23図 SI010出土土器(1)	第54図 グリッド出土土製品	44
第24図 SI010出土土器(2)・土製品	第55図 グリッド出土石器(1)	45
第25図 SI010出土石器	第56図 グリッド出土石器(2)	46
第26図 SI011	第57図 グリッド出土石器(3)	47
第27図 SI011出土土器(1)	第58図 グリッド出土石器(4)	48
第28図 SI011出土土器(2)	第59図 SK002・SK002出土土器	49
第29図 SI011出土石器(1)	第60図 SI001・SI005	50
第30図 SI011出土石器(2)	第61図 SA001	51
第31図 SK011	25	

表 目 次

第1表 遺構観察表	52	第4表 土製円盤観察表	55
第2表 縄文土器観察表	53	第5表 縄文時代石器観察表	56
第3表 土器片錐観察表	55		

図 版 目 次

図版1 練木遺跡周辺航空写真（昭和42年撮影）	図版9 1. SK003（北から）
図版2 1. 練木遺跡全景（北から）	2. SK004（北から）
2. 練木遺跡全景（南から）	3. SK007（北東から）
図版3 1. 第1トレンチ（東北東から）	4. SK010（西から）
2. 第2トレンチ（北から）	5. SK011（北から）
3. 第3トレンチ（南から）	6. SK012（西から）
4. 第4トレンチ（南南西から）	7. SK013（北東から）
図版4 1. 第13トレンチ（南西から）	8. SK013遺物出土状況1（北東から）
2. 第14トレンチ（南西から）	9. SK013遺物出土状況2（南東から）
3. 第17トレンチ（南から）	図版10 1. SH121（東から）
4. 第22トレンチ（東から）	2. 7F-68グリッド埋甕（西から）
図版5 1. 第18トレンチ遺構検出状況（西から）	3. SK002（1）東から
2. 8Gグリッド遺構検出状況1（北から）	4. SK002（2）東から
3. 8Gグリッド遺構検出状況2（北から）	5. 出土土器（1）
4. 基本土層（8F-19グリッド西壁）	6. 出土土器（2）
図版6 1. SI002（南西から）	7. 出土土器（3）
2. SI003（北から）	8. 出土土器（4）
3. SI004（東から）	図版11 1. SI005（西から）
図版7 1. SI006（北から）	2. SI001（南東から）
2. SI007（北東から）	3. SA001（南東から）
3. SI009（南西から）	図版12 遺構出土土器（1）
図版8 1. SI010（東から）	図版13 遺構出土土器（2）・グリッド出土土器（1）
2. SI011（南から）	図版14 遺構出土土器（3）
3. 9F-00~10G-00グリッド遺物出土状況（南西から）	図版15 遺構出土土器（4）
4. 10G-00グリッド遺物出土状況（西から）	図版16 遺構出土土器（5）
	図版17 遺構出土土器（6）
	図版18 グリッド出土土器（2）
	図版19 グリッド出土土器（3）

- 図版20 グリッド出土土器（4）
- 図版21 グリッド出土土器（5）
- 図版22 グリッド出土土器（6）
- 図版23 グリッド出土土器（7）
- 図版24 グリッド出土土器（8）
- 図版25 グリッド出土土器（9），遺構・グリッド出土土製品
- 図版26 遺構出土剥片石器，遺構出土礫石器
- 図版27 石鎌製作跡出土剥片石器，石鎌製作跡出土礫石器
- 図版28 グリッド出土剥片石器，グリッド出土礫石器

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

日本道路公団では、千葉市から富津市に至る高速自動車道である館山自動車道（路線名：東関東自動車道 千葉富津線）を計画した。この路線のうち、先に建設が終わった千葉市から木更津市に続く路線として、木更津市から君津市を経て富津市に至る21.6kmの区間が事業化され、木更津・富津線として建設が行われることとなった。

用地内には数多くの遺跡が所在することから、その取扱いについて、千葉県教育委員会と日本道路公団との慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な部分については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。

練木遺跡の発掘調査は、平成12年5月8日から平成12年9月29日までの5か月間にわたって上層の確認調査および本調査、下層の確認調査を実施した。

整理作業は、発掘調査が終了した翌年の平成13年度から実施した。発掘調査および整理作業を行った組織と担当者は以下のとおりである。

発掘調査 平成12年度 所長 高田 博

主席研究員 土屋治雄 研究員 城田義友、行川 永

整理作業 平成13年度 所長 高田 博

主席研究員 高橋博文

平成14年度 所長 鈴木定明

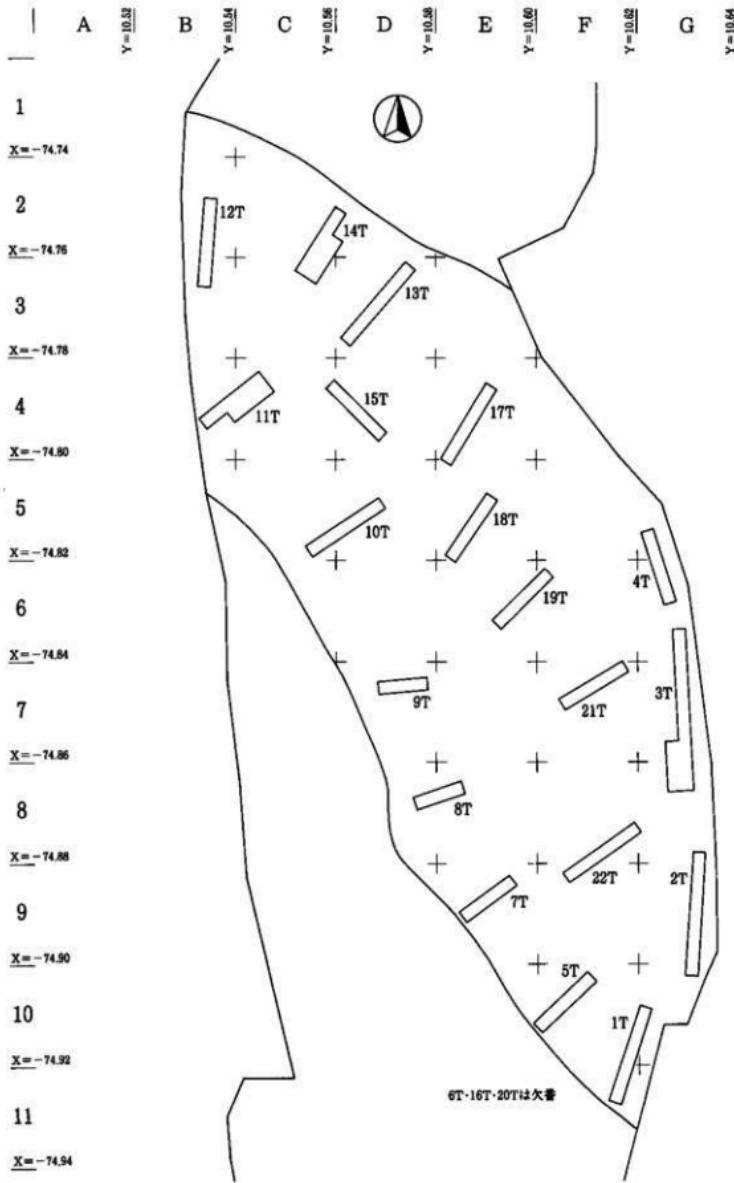
主席研究員 高橋博文 上席研究員 田島 新 研究員 半澤幹雄

2 調査の方法（第1・2・3図）

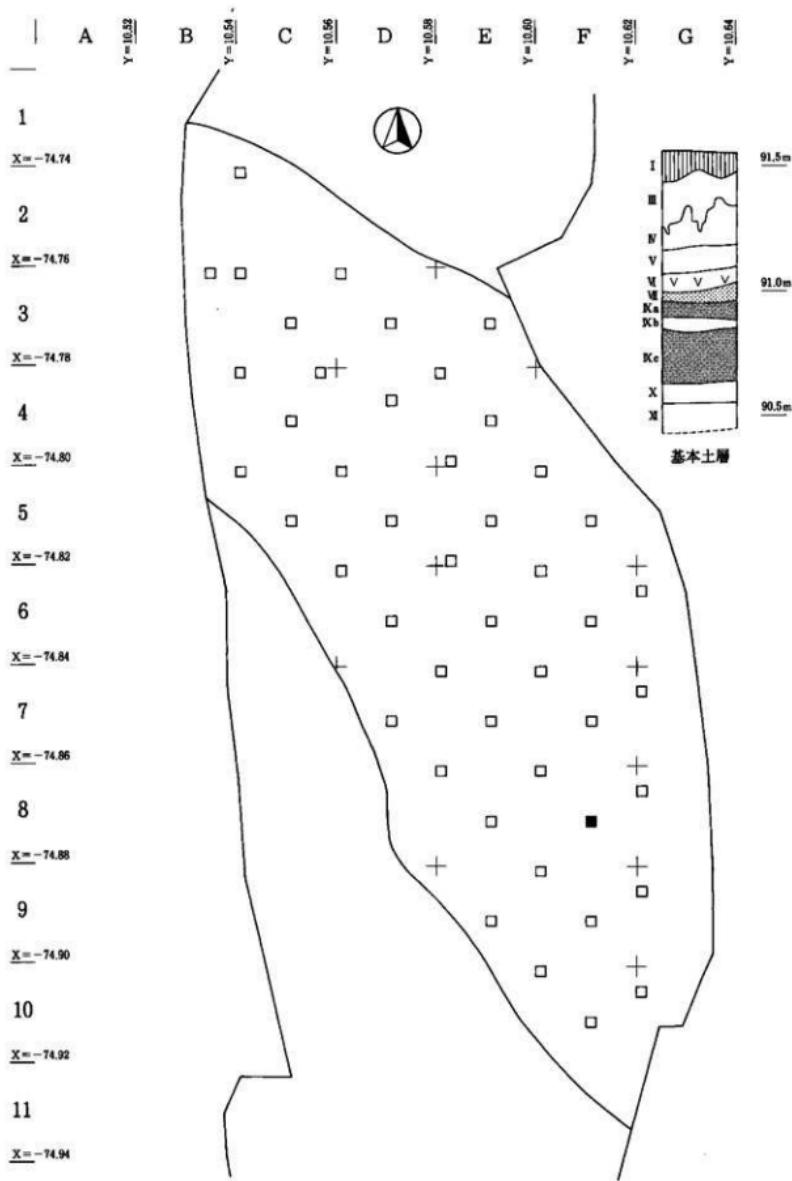
発掘調査の開始に際して、対象となる区域を包括するように国土地理院国家座標（第IX座標）を基準とした発掘区の設定を行った。大グリッドとして一辺20mとする区画を設定し、北西隅のグリッドを起点に西から東へA、B、C…とアルファベットの大文字を付し、北から南へは1、2、3…と数字を付し、数字とアルファベットの組み合わせで大グリッドの名称とした。さらにその大グリッドを一辺2mの小グリッドに分割し、大グリッドの北西隅に位置する小グリッドを00とし、東へ向かって01、02、03…と、南へ向かって10、20、30…と命名し、100の小グリッドに分割して最小区域の調査区とした。

上層の確認調査は調査開始時に、幅2mのトレンチを調査区の状況に合わせて調査対象面積9,200m²の10%に当たる920m²について設定し、遺構・遺物の分布状況および表土等の堆積状況などを把握する作業を行った。その結果、遺構および遺物が検出された6,000m²の範囲について、確認調査に引き続き上層の本調査を実施した。

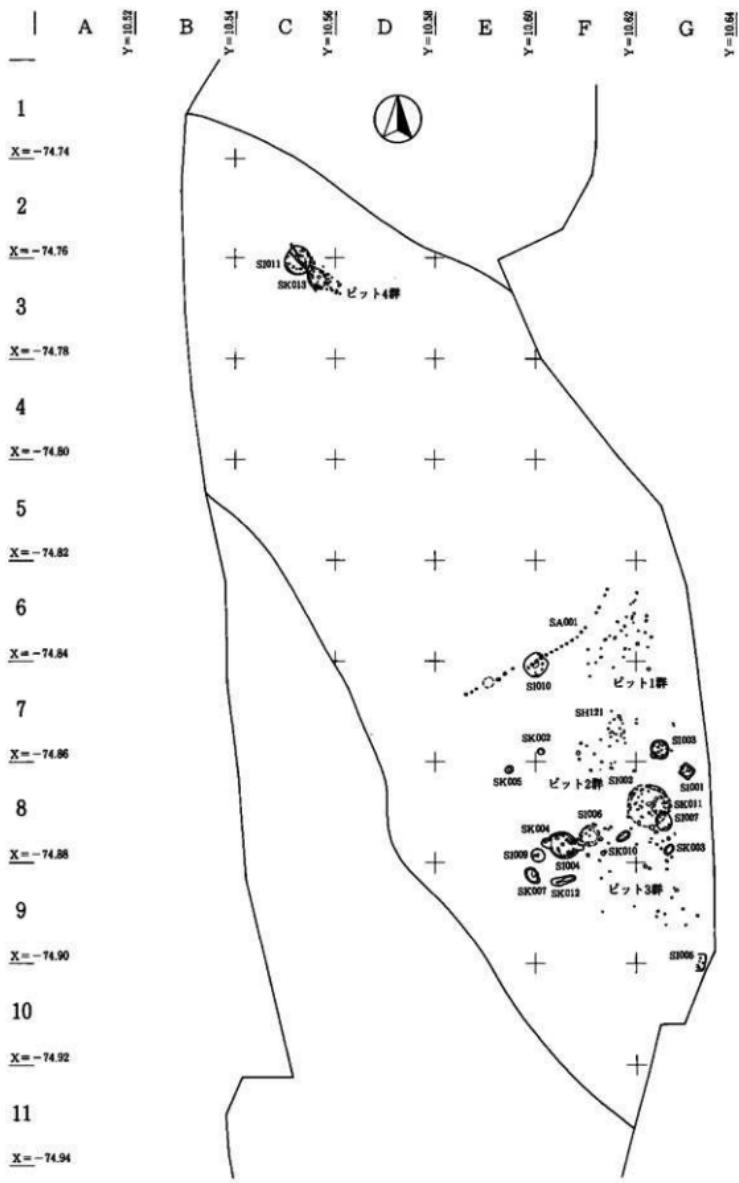
下層の確認調査は、上層の本調査終了に引き続いて、一辺2mの方形グリッドを調査対象面積9,200m²



第1図 上層確認トレンチ配置図 (1/1,000)



第2図 下層確認グリッド配置図(1/1,000)と基本土層



第3図 練木遺跡全体図 (1/1,000)

の2%にあたる184m²について一定間隔を持って46か所にわたって設定し、クラムシェルと人力を併用して実施した。なお、遺物が出土したグリッドではなく、下層については確認調査をもって終了とした。

第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置（第4・5図、図版1）

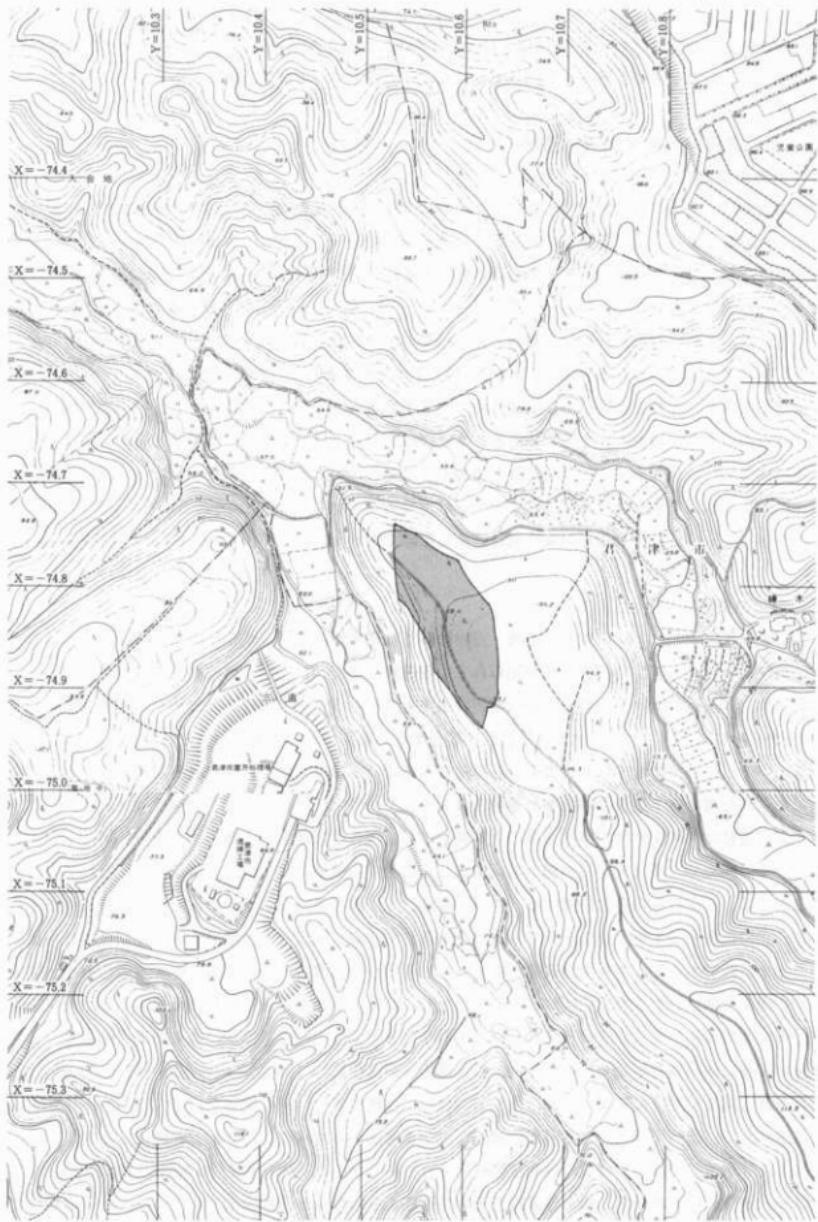
練木遺跡は、千葉県君津市練木字基445-25ほかに所在する。谷を挟んだ北側の丘陵の尾根は木更津市と君津市の境となっており、君津市の最も北に位置する遺跡の一つである。木更津市側は市境付近まで住宅地が開発されており、遺跡が所在する君津市側も本遺跡の西側の低地を中心に丘陵周辺まで宅地開発が迫ってきてている状況にある。

本遺跡は、千葉県内では最大級の流域面積を持つ河川である小糸川の下流域、本河川の右岸、西進する流れを南に望みながら連なる標高およそ100mの丘陵のやや奥まった一角に位置している。また、この丘陵は小糸川のすぐ北側を西進し、東京湾へ注ぐ小河川である畠沢川の浸食によって、小支谷が幾重にも入り込みながら東西に細長く続く丘陵である。本遺跡は、その小河川畠沢川の最奥部付近のこれまで細長く北東へ突き出た、両側を深い谷で挟まれた標高90mほどの丘陵先端付近に立地する。そして、丘陵下部の谷津に広がる水田面からの比高差はおよそ40mほどであり、かなりの高低差があると言える。畠沢川に沿って川を下っても7kmほどで現在の東京湾に達する距離である。

2 周辺の遺跡（第5図、図版1）

今回の発掘調査では、検出された遺構・遺物の多くは縄文時代中期前葉を中心としている。そこで、周辺の遺跡についても縄文時代の存在が知られている遺跡、調査されている遺跡を中心に見ていくことにする。まず、本遺跡の所在する君津市から周辺の遺跡を見てみると、本遺跡の谷を挟んだ南側の標高およそ100mの丘陵には、すでに知られた縄文時代中期後半から晩期にわたる集落が営まれた2. 三直貝塚が位置している。この遺跡もやはり東関東自動車道（木更津・富津線）建設に伴い発掘調査が行われ、縄文後期に作られた環状盛土遺構や斜面整形遺構をはじめ大型の竪穴住居跡・土坑・貝層などが発見されている。4. 畠沢遺跡は、縄文早期の撲糸文系の土器群を中心に縄文中期後半の土器を伴う竪穴住居跡などが出土している。同じく、縄文早期の土器（稻荷台式）を出土する遺跡として5. 大鷲遺跡が知られている。そのほかでは、三直貝塚の南に位置する3. 沖入遺跡、6. 赤羽遺跡などが小糸川右岸の丘陵に点在する。次に、北に位置する木更津市側を見てみると、本遺跡の北東2kmほどの台地に、縄文中期後半から後期にわたる集落跡である8. 伊豆山台遺跡がある。弥生時代から古墳時代後期を中心とする遺跡だが、縄文早期から縄文前期にわたる竪穴住居跡と土器を出土している。伊豆山台遺跡の北に隣接する10. 蓬華寺遺跡は、縄文時代後期の竪穴住居跡とそれに伴う土器などを出土している。ほかには東関東自動車道（千葉富津線）建設に伴う調査が行われた13. 金二谷台遺跡（縄文前期）、15. 堀之内台遺跡（縄文早・前期）、16. 山神遺跡（縄文早期一包含層）があげられる。ほかには縄文時代早期の遺物を出土する14. 小谷追跡、17. 打越遺跡、18. 莽が作貝塚、19. 莽が作遺跡などが本遺跡から直線にして3kmの範囲に分布している。

また、練木遺跡では奈良時代の火葬墓が検出されているが、本遺跡の北側には東関東自動車道（木更津・富津線）建設に伴う調査で、躰ヶ作遺跡や南羽鳥遺跡でも火葬墓が多数検出されている。今後の報告が待たれるところである。

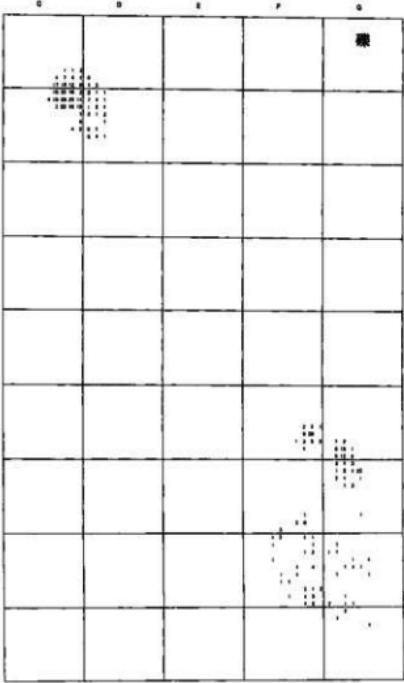
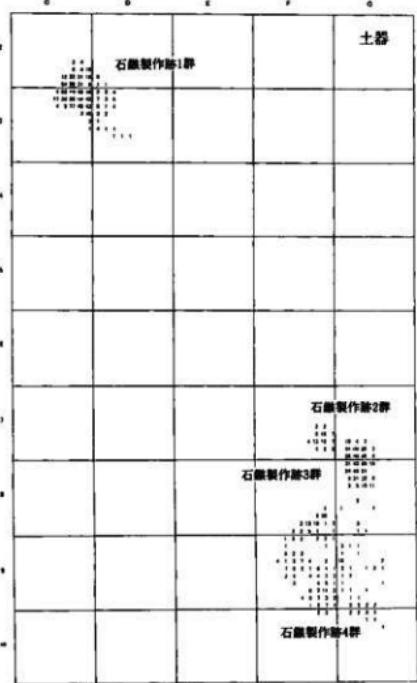
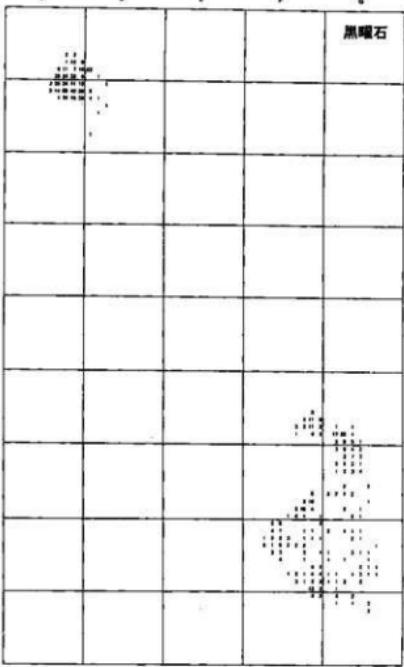
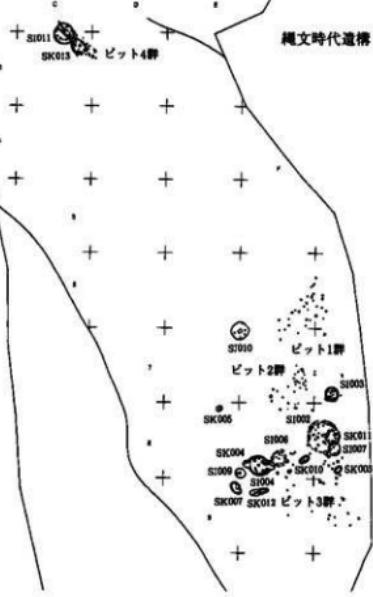


第4図 練木遺跡周辺地形図(1/5,000)



1. 練木遺跡(君津)
 2. 三直貝塚(君津)
 3. 煙沢遺跡(君津)
 4. 沖入遺跡(君津)
 5. 大鷲遺跡(君津)
 6. 赤羽遺跡(君津)
 7. 東谷遺跡(木更津)
 8. 伊豆山台遺跡(木更津)
 9. 山田遺跡(木更津)
 10. 邁華寺遺跡(木更津)
 11. 天袖前遺跡(木更津)
 12. 大門口遺跡(木更津)
 13. 金二谷台遺跡(木更津)
 14. 小谷遺跡(木更津)
 15. 堀ノ内台遺跡(木更津)
 16. 山神遺跡(木更津)
 17. 打越遺跡(木更津)
 18. 蔵ヶ作貝塚(木更津)
 19. 蔵ヶ作遺跡(木更津)

第5図 練木遺跡の位置と周辺の遺跡



第6図 縄文時代遺構・土器・石器分布状況

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 繩文時代

1 概要

線木遺跡は、館山自動車道（東関東自動車道 千葉富津線）建設に伴う埋蔵文化財調査の中で、新たに確認された遺跡である。丘陵の両側は現在、烟沢川と呼ばれる川によって深く削られ、幅およそ250m、長さ1,000mほどの標高が、約100mの細長い台地の北西先端部の付近に位置する。南側の谷を挟んだ台地上には、周知の遺跡である縄文時代後期を中心とする三直貝塚が立地する。また、本遺跡が乗る台地の南側約2kmほどの所には、県内でも流域面積が最大級の小糸川が、西の東京湾に向かって流れている。

今回発掘調査を実施した地域は、館山自動車道の工事に関連する9,200m²についてである。ほぼ半年にわたる発掘調査の成果は縄文早期の陥穴1基、中期前半の竪穴住居跡8軒、小竪穴2基、土坑5基、ピット群4か所、石器製作跡4か所などが検出され、関連する遺物が出土した。縄文早期の遺構は陥穴1基のみであるが、撫糸文系の土器などが少量確認されている。この早期の陥穴を除けば、他のほとんどは縄文中期前半の時期が中心で、土器型式で言えば、阿玉台式および勝坂式と若干の加曾利E式の中期初頭から中葉にかけての期間に集落が営まれたと考えられる。

2 遺構・遺物

竪穴住居跡（第3・6図）

今回の調査で確認・検出された竪穴住居跡は合計8軒である。これら竪穴住居跡のはほとんどは、台地の中央付近である調査区の南側にまとまって、それも接近した状態で検出されている。また、ほかの遺構との重複はあったものの、竪穴住居跡同士の重複は一か所を除き、なかった。また、台地の縁辺に近い北側の調査区には、竪穴住居跡が一軒離れて検出されているのが興味深い。

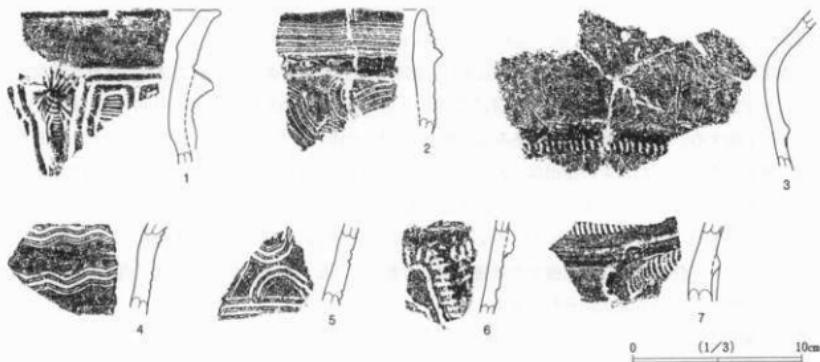
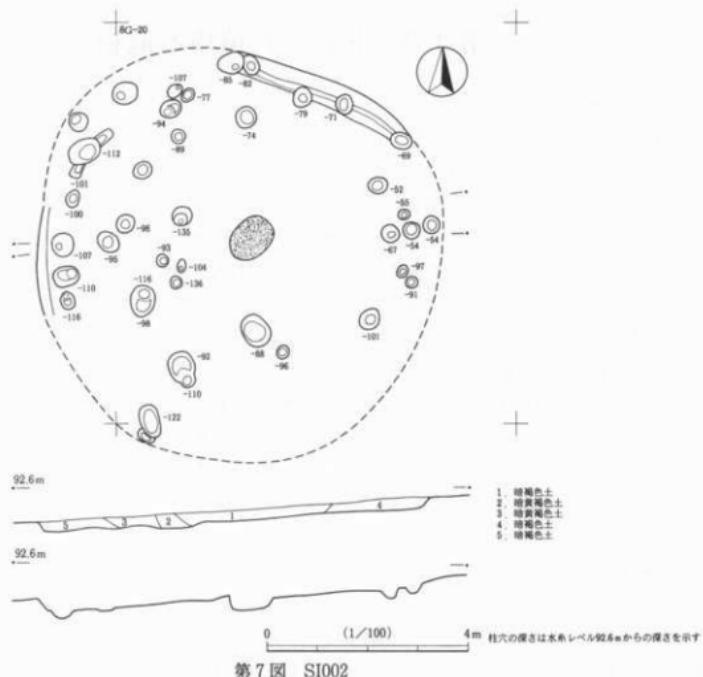
SI002（第7～9図、第1・5表、図版6・14・26）

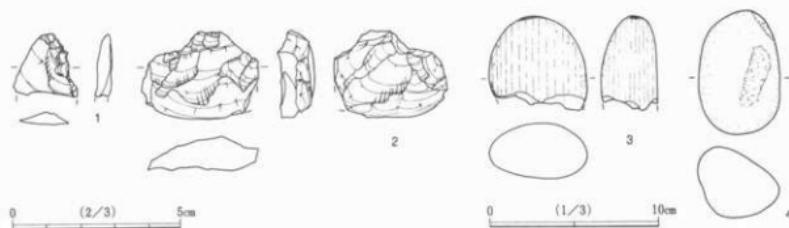
調査区の南東側、8G-60に位置する。北東側に一部が確認された整溝と壁、および検出された柱穴の状況から、平面形状は直径が4.0mほどの円形を呈すると考えられる。南東側で住居SI007と、東側で土坑SK011と重複する。確認面からの掘り込みは、最大で0.2mと浅い。床面は一部掘り過ぎており、硬化面なども確認できなかった。炉の検出は一か所のみで、中央付近に地床炉が検出されている。建て替えによる炉の移動や拡張はなかったようである。整溝は、北東側の一部で浅い溝が検出されたのみである。柱穴は39か所検出されているが、ほとんどは壁を巡るようにはば一定の間隔を持って掘られ、西側では二重に検出されており、住居西側への拡張または建て替えも考えられる。主柱穴については、内側の整溝と重なるように検出されている5本がそれと考えられる。

遺物は縄文土器、石器が出土している。

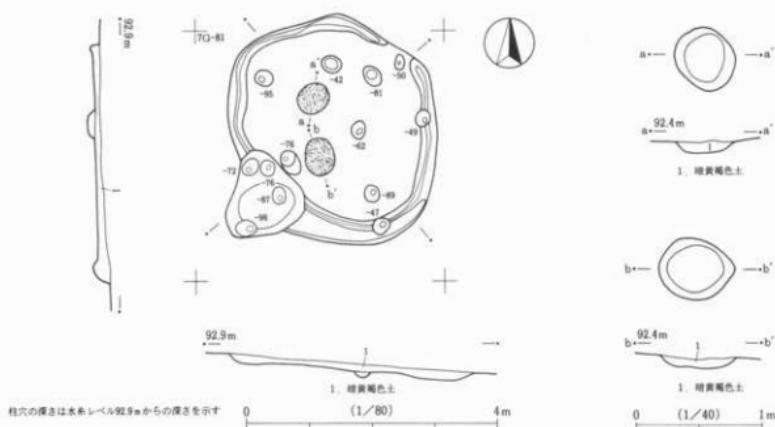
SI003（第10～12図、第1・5表、図版6・14・26）

SI002の北側、7G-82に位置する。平面形状は長径3.9m、短径3.4mを測る、円形に近い梢円形を呈する。

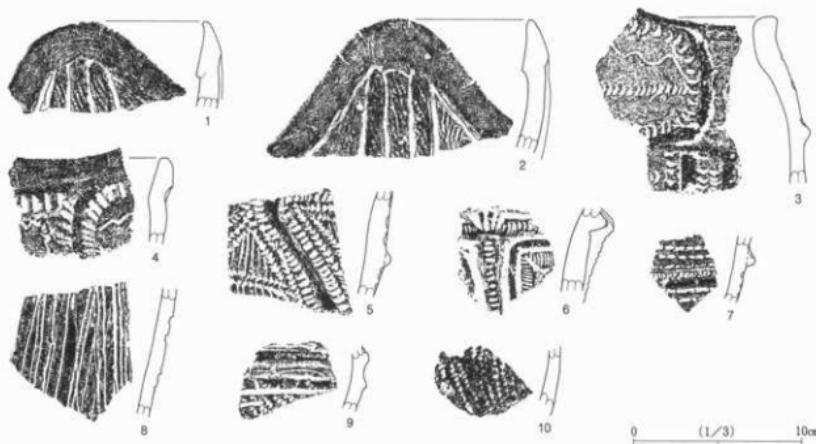




第9図 SI002出土石器



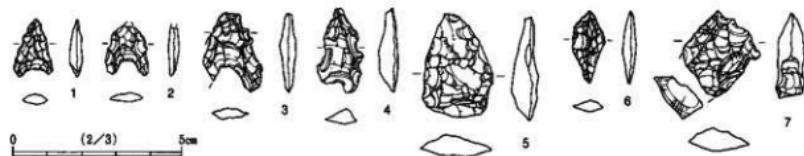
第10図 SI003



第11図 SI003出土土器

確認面からの掘り込みは、最大でも0.2mと浅い。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は住居の中央付近に、やや間隔をおいて南北に分かれて2か所検出されている。いずれも地床炉である。壁溝はほぼ一周するが、南東部では結果的に主柱穴の内側へ入り込むなど不規則である。この南東壁付近には、床面からの深さ0.1mほどの楕円形を呈する浅いくぼみが張出部に付き、またこれに続くようにして南端には、壁溝の外側に沿って床面からの高低差がおよそ5cmの高まりをもって細長く巡る。柱穴は13本検出されている。主柱穴については、2か所の炉を囲む4本が考えられる。

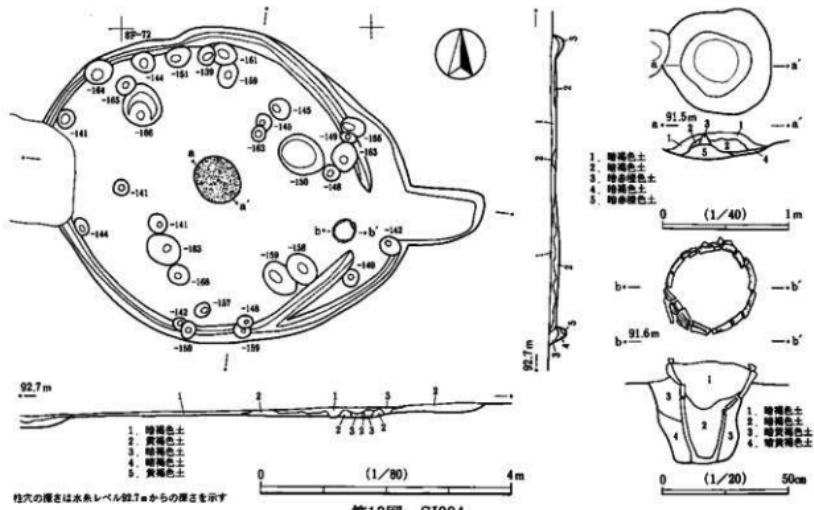
遺物は縄文土器、石器が出土している。



第12図 SI003出土石器

SI004（第13～15図、第1・2・5表、図版6・12・14・26）

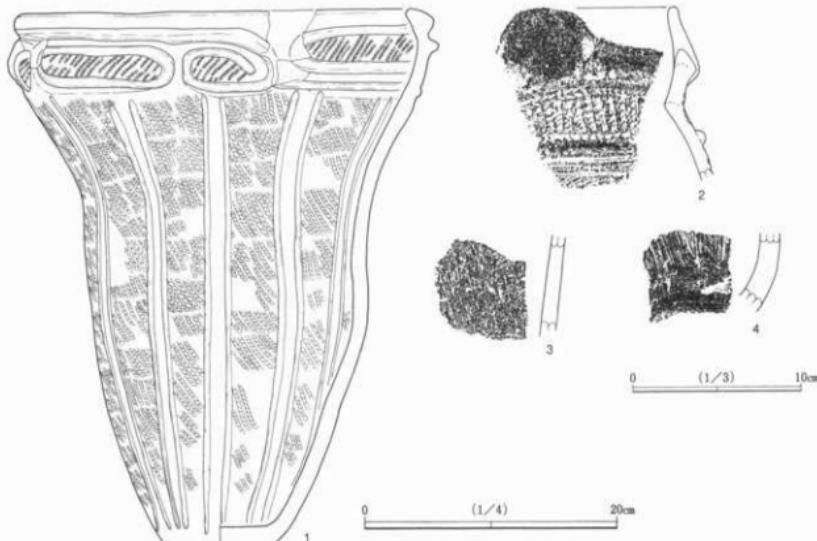
SI002の南東側、8F-82に位置する。西側で土坑SK004と重複する。平面形状は長径6.3m、短径5.9mを測り、やや楕円形を呈する。また、確認面からの掘り込みは、最大で0.1mと非常に浅い。床面は比較的平坦であり、硬化面は確認できなかった。住居の東側では、床面が壁溝の外側に沿ってほぼ半周にわたっ



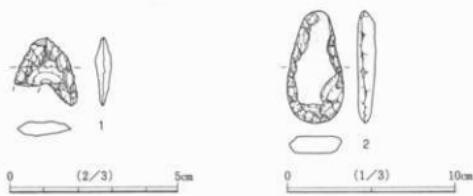
第13図 SI004

て検出されている。また、東端には長さ1.4mほどの張り出しが見られる。壁溝で囲まれた範囲は、直径がほぼ5mの円形を呈しており、本住居は東側への拡張が行われたと考えられる。炉は住居のほぼ中央に1か所、地床炉が検出されている。壁溝はほぼ一周すると考えられる。柱穴は31か所検出されたが、多くは壁に沿って検出されている。主柱穴については、炉を囲みほぼ等間隔に位置する4本が、それと考えられる。また、本住居東側の壁溝の内側に、溝に接して穴が掘られ、深鉢形土器の完形品が正位の状態で埋設されていた。

遺物は縄文土器、石器が出土している。



第14図 SI004出土土器

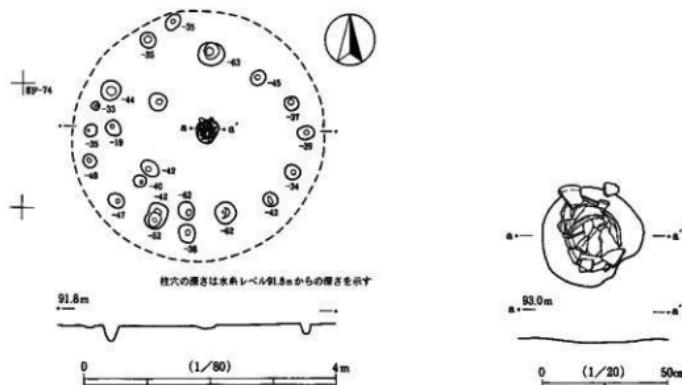


第15図 SI004出土石器

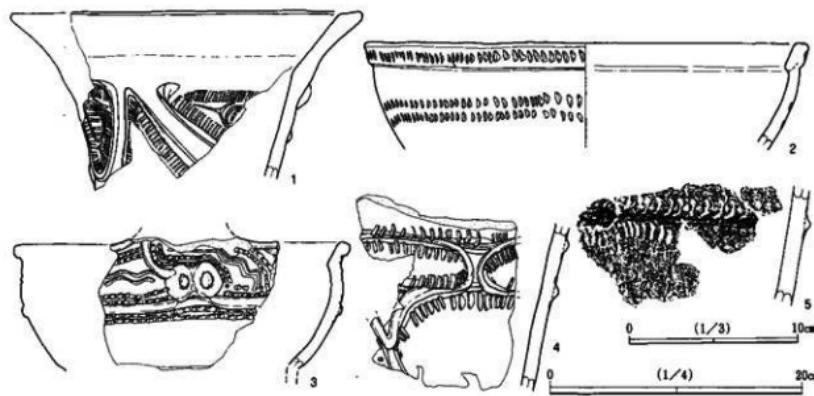
SI006 (第16・17図、第1・2表、図版7・12・14)

SI004の北東側に接するようになり、8F-75に位置する。柱穴と炉が検出されたのみである。平面形状は柱穴の位置などから、直径が4.0mの円形を呈すると考えられる。床面は、それとはっきりわかるものは検出できなかった。炉は住居のほぼ中央と思われる位置から検出されている。やや大きめな土器片が一周して埋設されている、土器片囲いの炉である。

遺物は縄文土器が出土している。



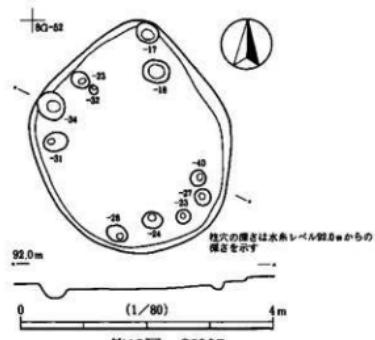
第16図 SI006



第17図 SI006出土土器

SI007 (第18図, 第1表, 図版7)

SI002の南東側で重複する, 8G-62に位置する。平面形状は長径3.4m, 短径3.1mを測る, やや梢円形を呈する。確認面からの掘り込みは, 最大でも0.1mと非常に浅い。床面はほぼ平坦である。炉および整溝は検出されなかった。柱穴は壁に沿うように11か所検出された。主柱穴は4本と考えられる。遺物は出土していない。

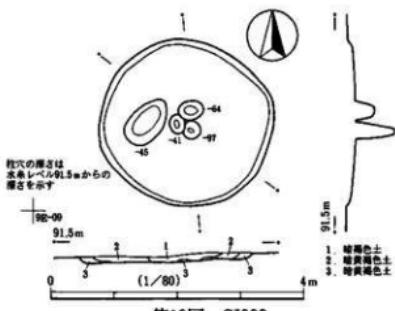


第18図 SI007

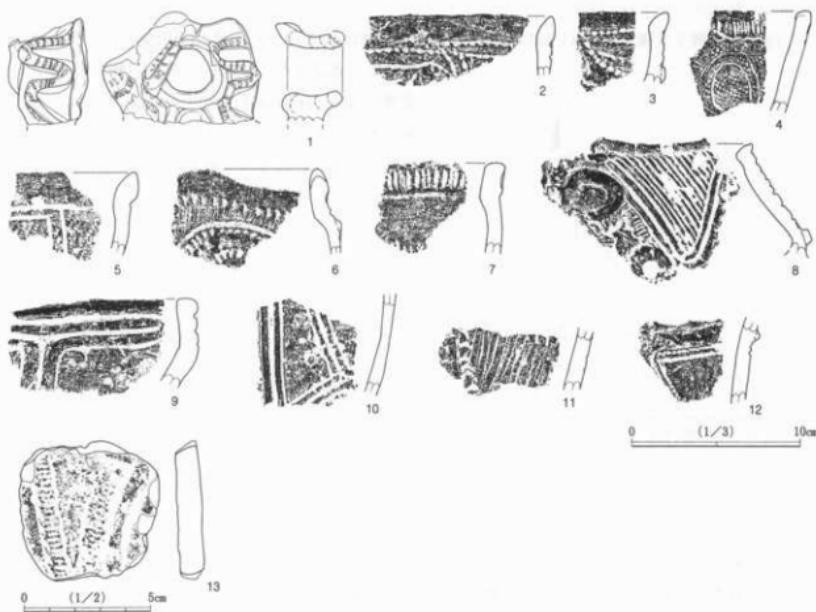
SI009 (第19~21図, 第1~3・5表, 図版7・12・15・26)

SI004の南西側に隣接する, 8F-90に位置する。平面形状は直径が2.4mの円形と考えられる。確認面からの掘り込みは, 最大でも0.1mと非常に浅い。床面はほぼ平坦である。炉は検出されなかった。柱穴は住居の中心付近にまとまって4か所検出されているが, 主柱穴も含めて本住居に伴うものかどうか詳細は不明である。

遺物は縄文土器, 土器片錐, 石器が出土している。



第19図 SI009



第20図 SI009出土土器・土製品

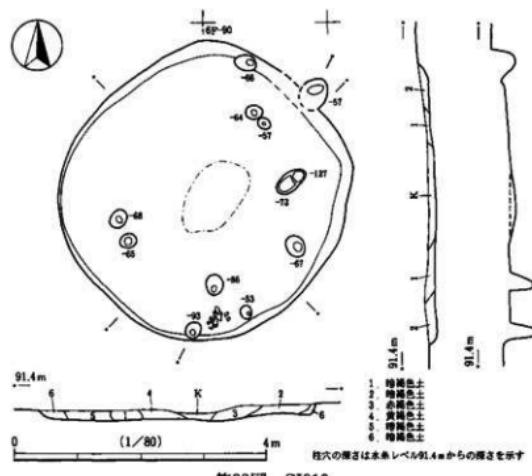


第21図 SI009出土石器

SI010 (第22~25図、第1~3・5表、図版8・12・15・26)

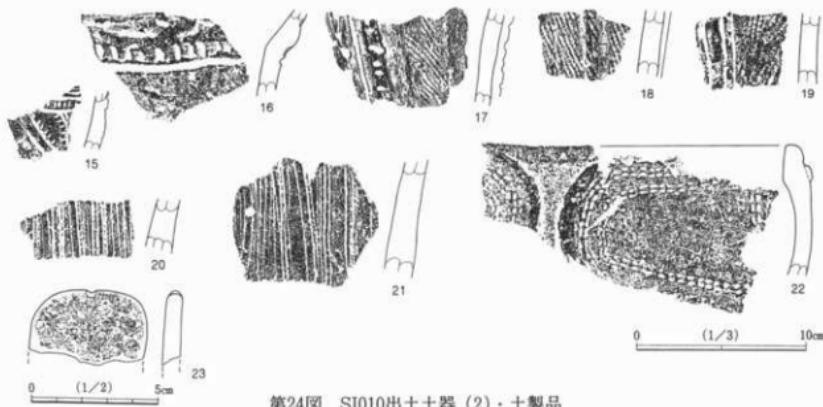
調査区の中央に近い、7E-00に位置する。横列SA-001と重複する。平面形状は長径4.5m、短径4.4mのほぼ円形を呈する。確認面からの掘り込みは、最大で0.1mと非常に浅い。床面はほぼ平坦であるが、遺構との重複や後世の攪乱を受けてはっきりしない。そのため、炉の存在は確認されたものの詳細は不明である。柱穴は10か所検出され、主柱穴は炉を囲むように配置された4本の柱穴と考えられるが、残る1本が確認できなかった。

遺物は縄文土器、土器片錐、石器が出土している。

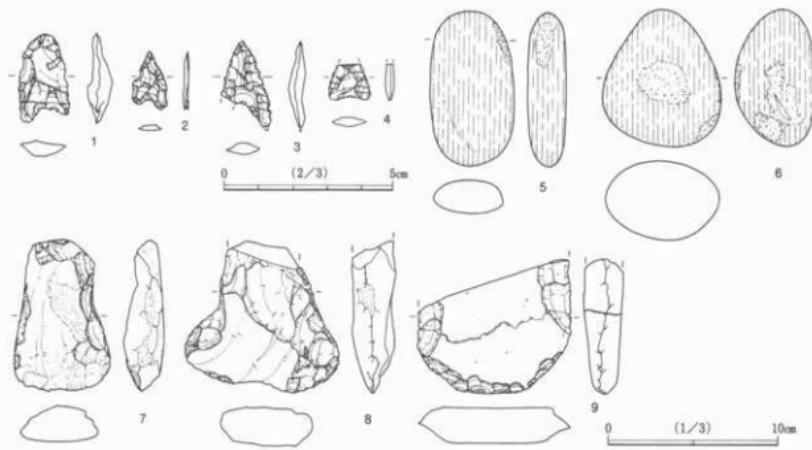




第23図 SI010出土土器 (1)



第24図 SI010出土土器(2)・土製品

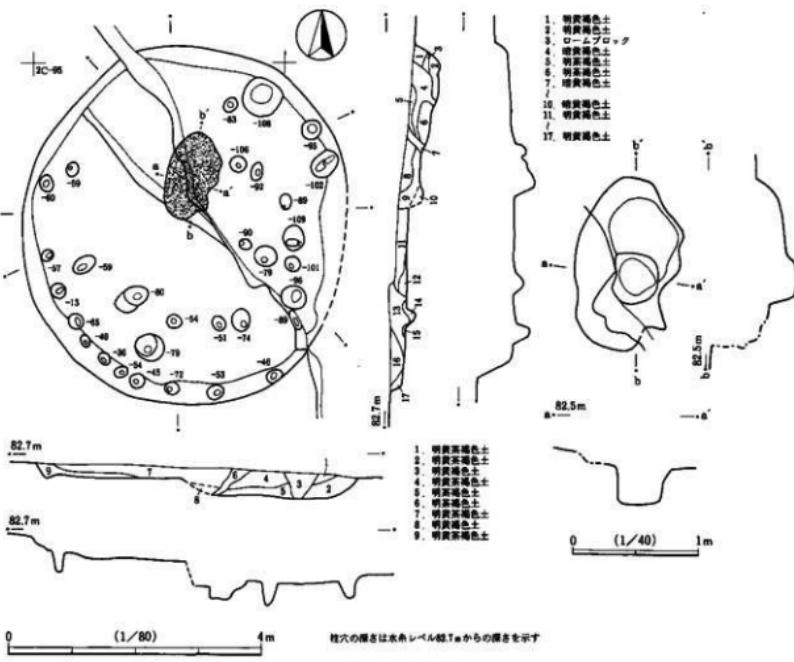


第25図 SI010出土石器

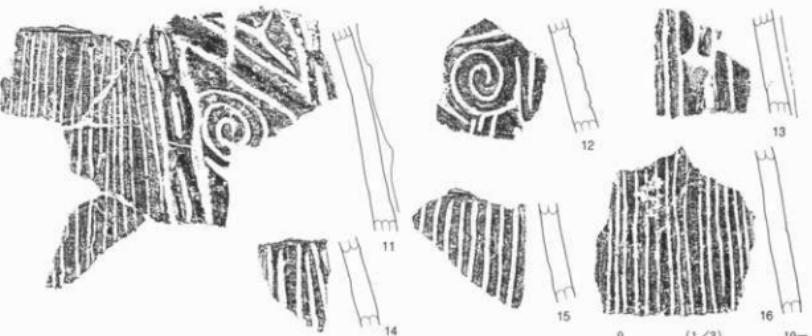
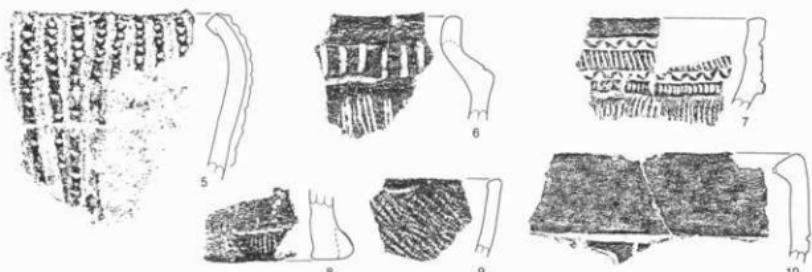
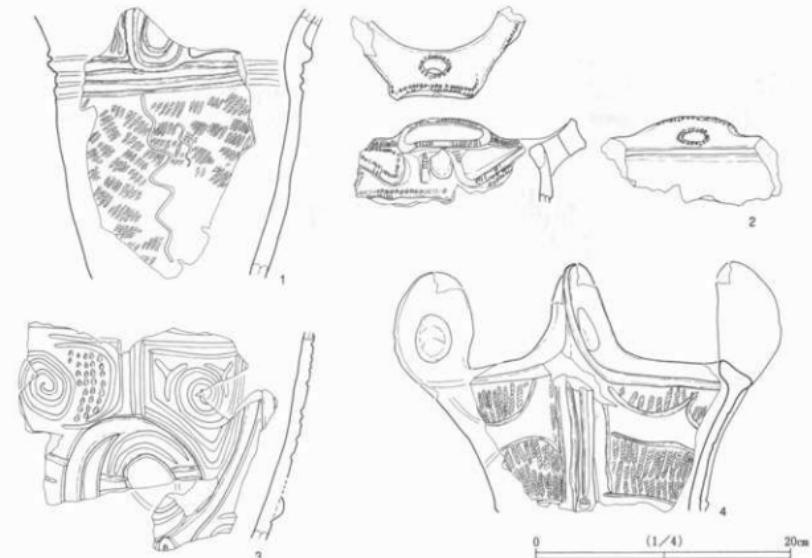
SI011 (第26~30図、第1~3・5表、図版8・12・16・26)

調査区北側、台地の先端に近い3C-06に位置する。平面形状は直径5.5mほどの円形を呈すると考えられる。掘り込みは確認面から0.3mと比較的浅い。ただし、本住居の中央付近を北西から南東にかけて、地盤によるもののか地割れが原因と思われる、南西側が高く北東側が低い、およそ0.2mの段差（地割れ）が生じているため、本来の形状および掘り込みの深さの詳細は不明である。炉は住居中央やや北寄りに地床炉が検出されているが、ちょうど地割れと重なり、擾乱を受けたようで詳細は不明である。柱穴は住居の壁に沿って、内側と外側に二重に巡るように炉の南側を中心に30か所検出された。住居は建て替えまたは拡張したと考えられ、最後の主柱穴が何本であったかは不明であるが、内側の配列の状況からいずれの住居とも6本が考えられる。なお、地割れと本住居の関係は、本住居の構築された以降であることが調査の過程で確認されているが、破棄後であるかなど詳細は不明である。

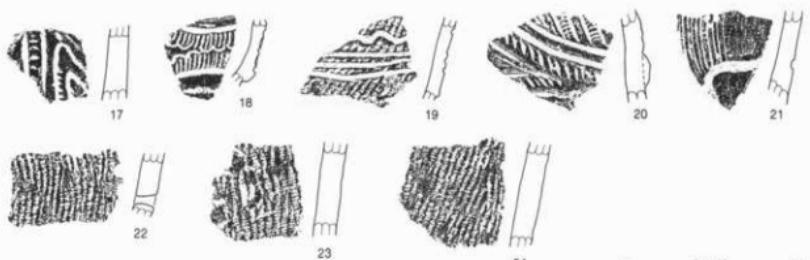
遺物は縄文土器、石器が出土している。



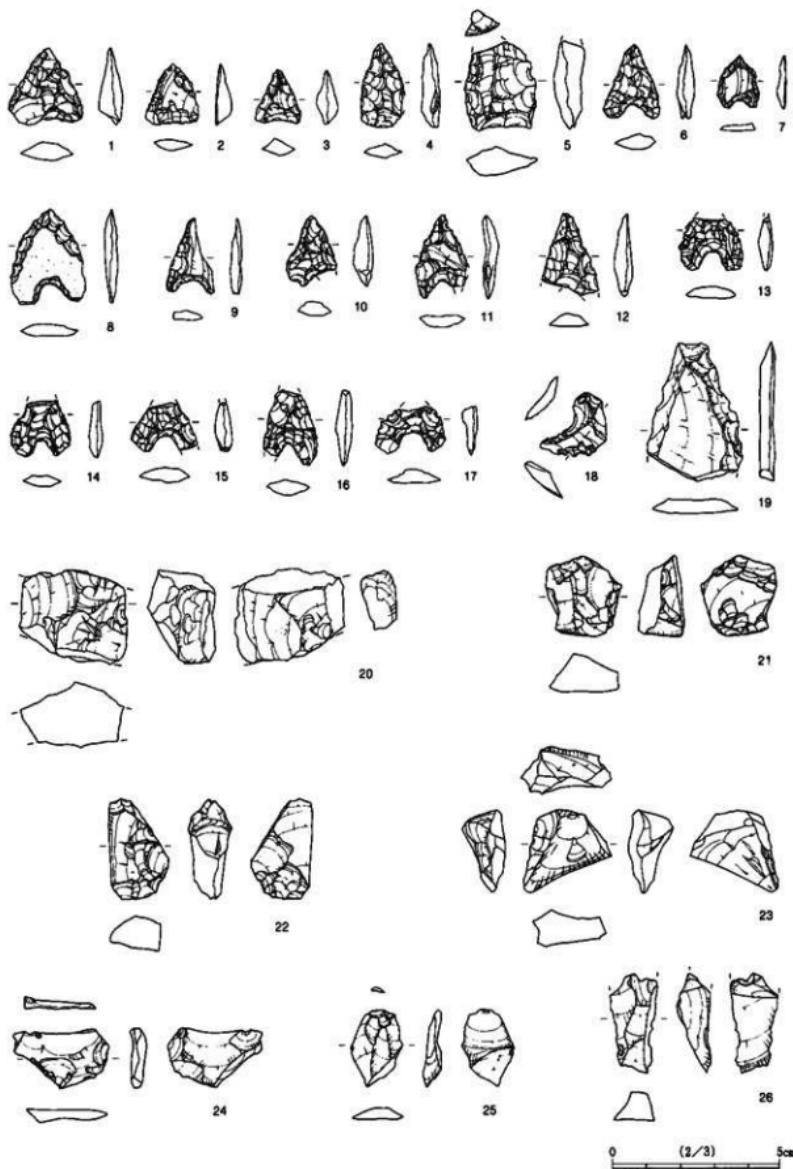
第26図 SI011



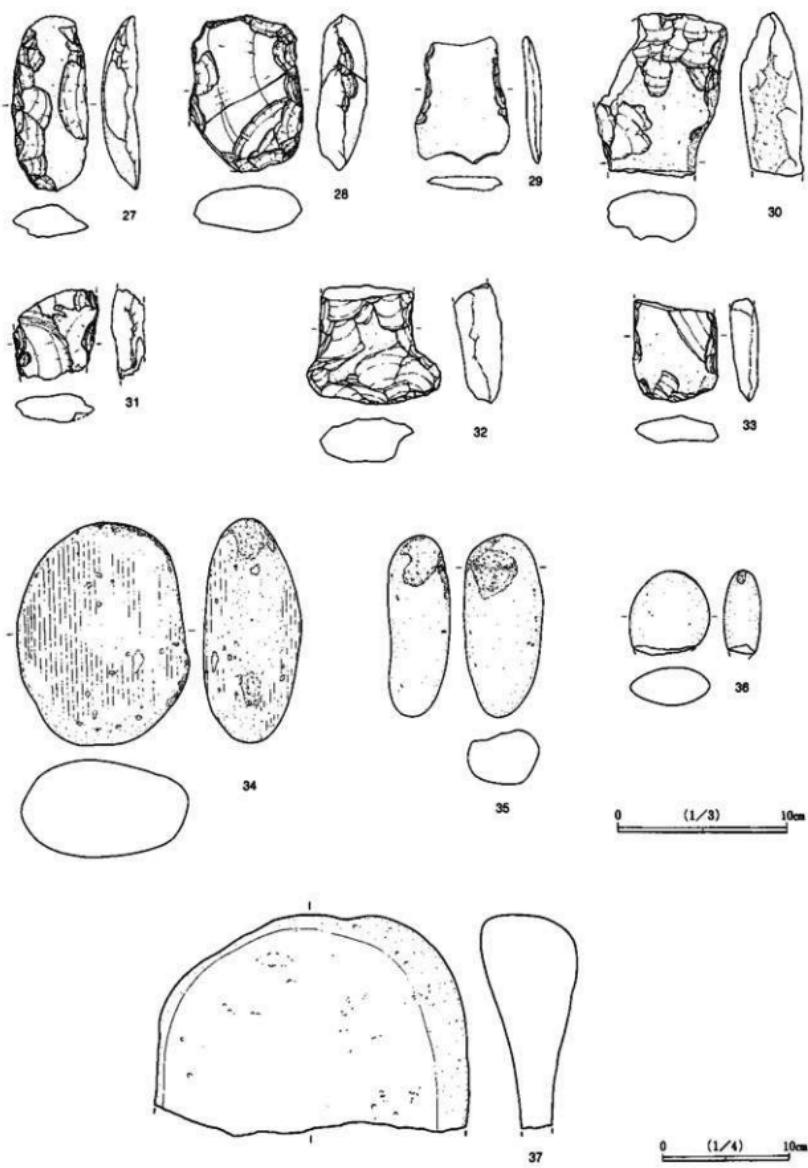
第27図 SI011出土土器 (1)



第28図 SI011出土土器 (2)



第29図 SI011出土石器（1）



第30図 SI011出土石器 (2)

小堅穴（第3・6図）

小堅穴は、堅穴住居跡と重複または隣接した2基が検出されたのみである。その中でも、SK013は堅穴住居跡SI004と接し、また伴うピットに土器を埋設するなどの特徴も見られた。これらの小堅穴は、あるいは住居跡の可能性もある。

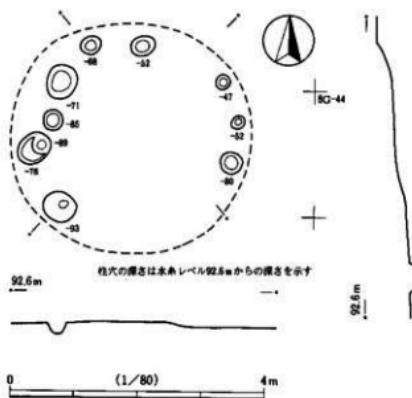
SK011（第31図、第1表、図版9）

堅穴住居跡SI002の東側で重複し、南側では堅穴住居跡SI007と隣接する。8G-42に位置する。ピットのみの検出で、その位置などから平面形状は直径およそ1.9mの円形を呈すると考えられる。ピットは9か所、遺構の壁に沿うように円を描くように検出されている。炉は検出されていないが、あるいは住居跡と思われる。遺物で図示できるものはなかった。

SK013（第32～34図、第1～3・5表、図版9・13・17・26）

調査区北側に位置する、堅穴住居跡SI011の南側に隣接している。3C-28に位置する。本小堅穴もSI011と同様に、地割れの痕跡を西側の壁付近に残している。平面形状は検出されたピットの位置などから、直径およそ3.5mの円形を呈すると考えられる。ピットは21か所検出されているが、その多くが遺構の壁に沿うようにほぼ円形を描くように検出されている。そのうちの北西部に位置し、やや内側に入っている若干大きめのピットからは、深鉢形土器の胴部分が埋設されていた。炉は検出されていないが、あるいは住居跡と思われる。

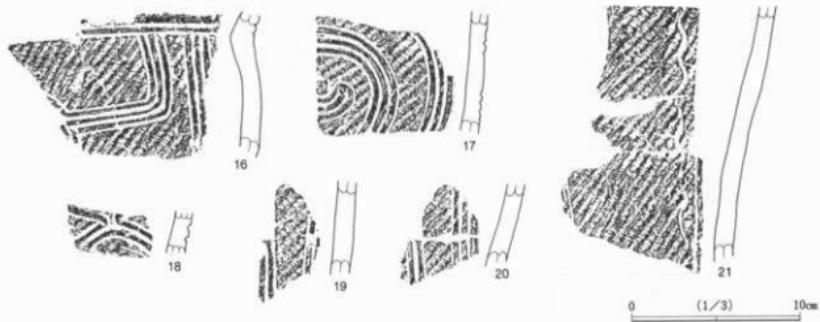
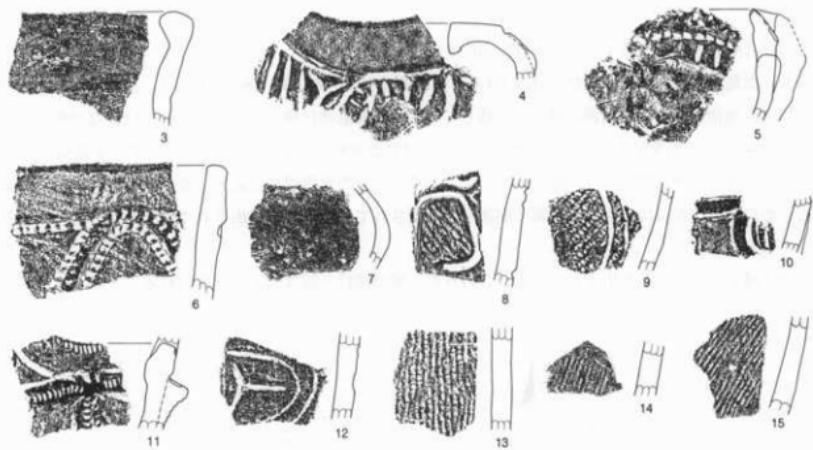
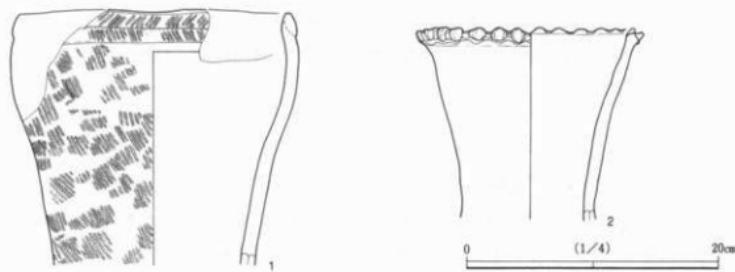
遺物は縄文土器、石器が出土している。このうち、第33図17～22は大木式と思われる。



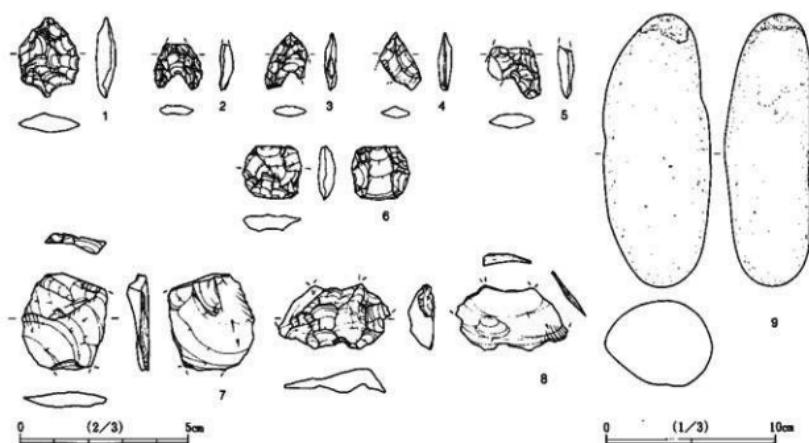
第31図 SK011



第32図 SK013



第33図 SK013出土土器



第34図 SK013出土石器

土坑（第3・6図）

土坑は、調査区の南側に散在して5基検出されている。

SK004（第35図、第1表、図版9）

竪穴住居跡SI004の西側で、本土坑の東側一部が重複する。7F-81に位置する。平面形状は長径が2.0m、短径が1.6mを測る、不整の楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは、最大でも0.1mと非常に浅い。西寄りに大きな浅いくぼみを伴い、北東壁際にピットが2か所検出されている。SI004との新旧関係は、土層断面観察により本遺構が新しい。遺物で図示できるものはなかった。

SK005（第35図、第1表）

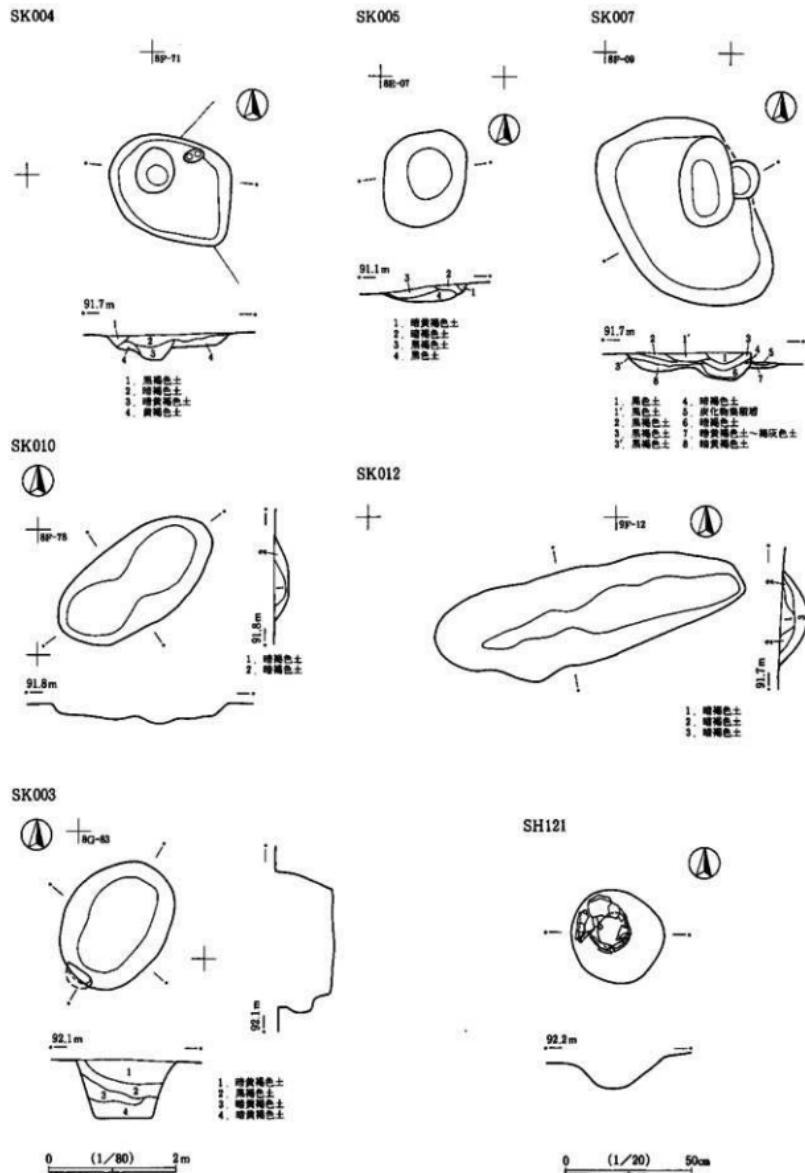
調査区南側、8E-07に位置する。平面形状は長径1.6m、短径1.3mを測る、楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは、最大0.3mと比較的深い。底面は鍋底状を呈しており、ピットなどの検出はなかった。遺物で図示できるものはなかった。

SK007（第35図、第1表、図版9）

竪穴住居跡SI004の南西側、9E-19に位置する。平面形状は長径3.2m、短径2.4mを測る、不整の楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは、最大でも0.2mと浅い。床面はほぼ平坦である。北東側壁近くに、浅い大小の窪みが並んで検出されている。遺物で図示できるものはなかった。

SK010（第35図、第1表、図版9）

竪穴住居跡SI002の南西側に近い、9E-78に位置する。平面形状は長径2.9m、短径1.4mを測る、長楕円



第35図 SK004・005・007・010・012・003、SH121

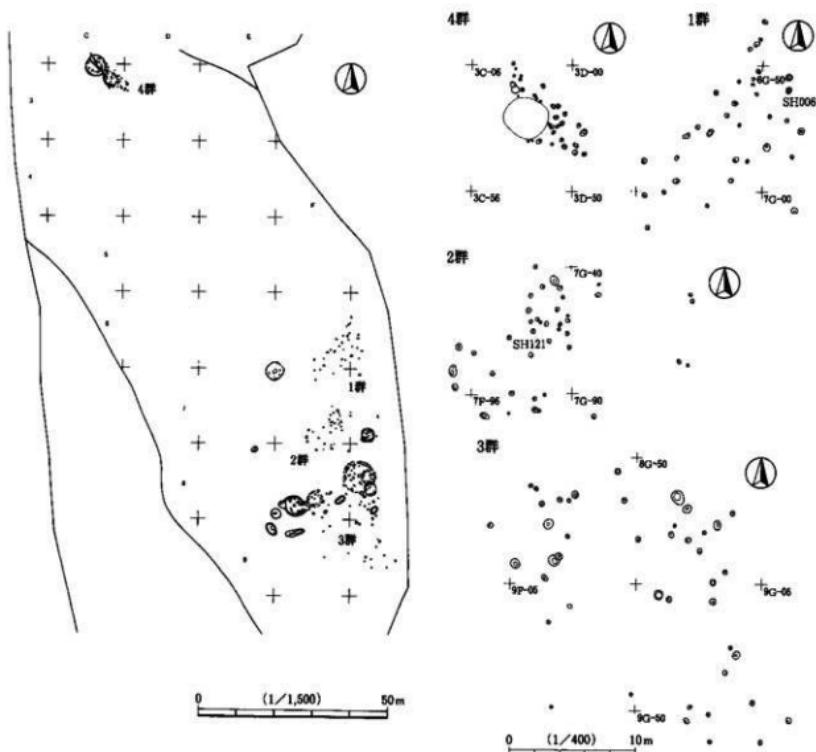
形を呈する。確認面からの掘り込みは、最大で0.3mと比較的浅い。底面はやや凹凸があり、平面形状がヒョウタン状を呈する。ピットの検出はなかった。遺物で図示できるものはなかった。

SK012 (第35・37図、第1表、図版9・17)

堅穴住居跡SI004の南側、土坑SK007の東側にやや離れる、9F-12に位置する。平面形状は長径2.5m、短径0.8mを測る、長楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは、最大で0.3mと比較的浅い。底面は比較的平坦だが、不整形である。第37図1~4が出土した土器である。

陷 穴 (第3・6図)

縄文早期の所産である陷穴が、調査区の南東端近くから1基のみ検出されている。



第36図 ピット群分布状況

SK003（第35図、第1表、図版9）

竪穴住居跡SI003の南側にやや離れた、8G-93に位置する。平面形状は長径2.1m、短径1.7mの、長軸を北東—南西に持つ梢円形を呈する。確認面からの掘り込みは、0.9mとやや深い。底面は平坦で、壁は外へ向かって緩やかに開きながら立ち上がる。底部にはピットなどの施設は検出されなかったが、南西の壁や確認面近くに、壁に直交するように掘り込みが検出された。用途・目的の詳細は不明である。遺物で図示できるものはなかった。

ピット群（第3・6図）

ピット群は大きく4か所で検出されており、それぞれ1群～4群と呼称した。これらのピット群の一部は、住居跡の柱穴の可能性もある。なお、SH121は埋甕を伴う。

SH006・121（第35・36・37・38図、第1・2・5表、図版13・26）

SH006は1群のやや東側の、6G-51に位置する。遺物で図示できるものはなかった。

SH121は2群のほぼ中央の、7F-68に位置する。このうち、SH121の北側のピット群は、ほぼ円形を呈すことから住居跡の可能性もある。第37図5が出土した土器である。

石器製作跡（第6図）

今回の調査では、大量の石器、砾、土器類がまとまって発見された地点が4か所検出された。石器が多く発見されたことから、石器製作跡と呼称した。また、これらは北側1か所と南側3か所に分離され、それぞれ1群～4群とした。このうち、4群はさらに細分される可能性もあるが、明確に識別することはできなかった。

1群（第6・39・40図、第5表、図版8・27）

1群は遺跡の北西に位置する。比較的広い範囲に分布している。また、3群とともに多量の剥片類が出土している。

2群（第6・41図、第5表、図版27）

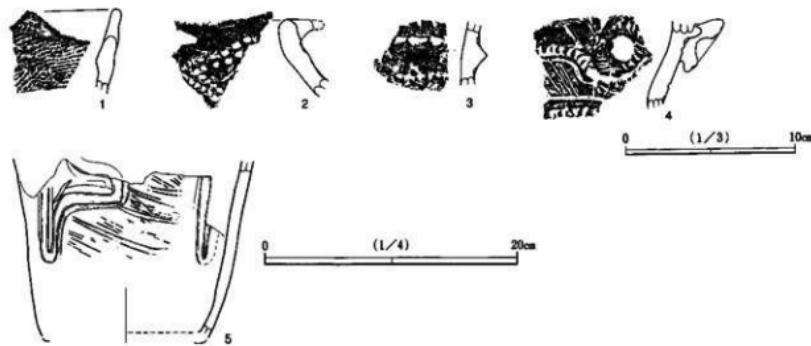
2群は3群に近接して、遺跡の南東に位置する。比較的狭い範囲に分布している。出土量も他の製作跡に比べ、少ない。

3群（第6・42図、第5表、図版27）

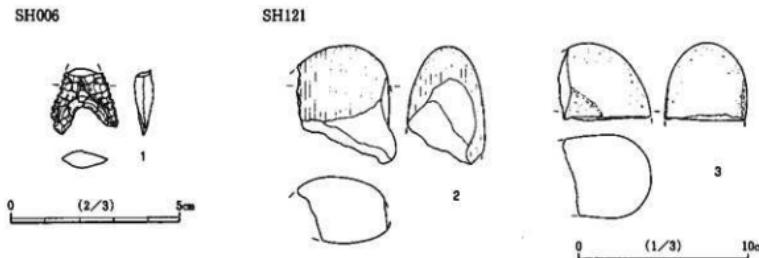
3群は遺跡の南東に位置する。また、1群とともに多量の剥片類が出土しているが、分布する範囲は比較的狭い。

4群（第6・43・44図、第5表、図版27）

4群は遺跡の南東に位置し、2・3群のさらに北側に分布する。散漫な分布状態を示しており、さらに細分される可能性もあるが、出土量は少ない。



第37図 土坑・ピット群出土土器 (1~4 SK012, 5 SH121)

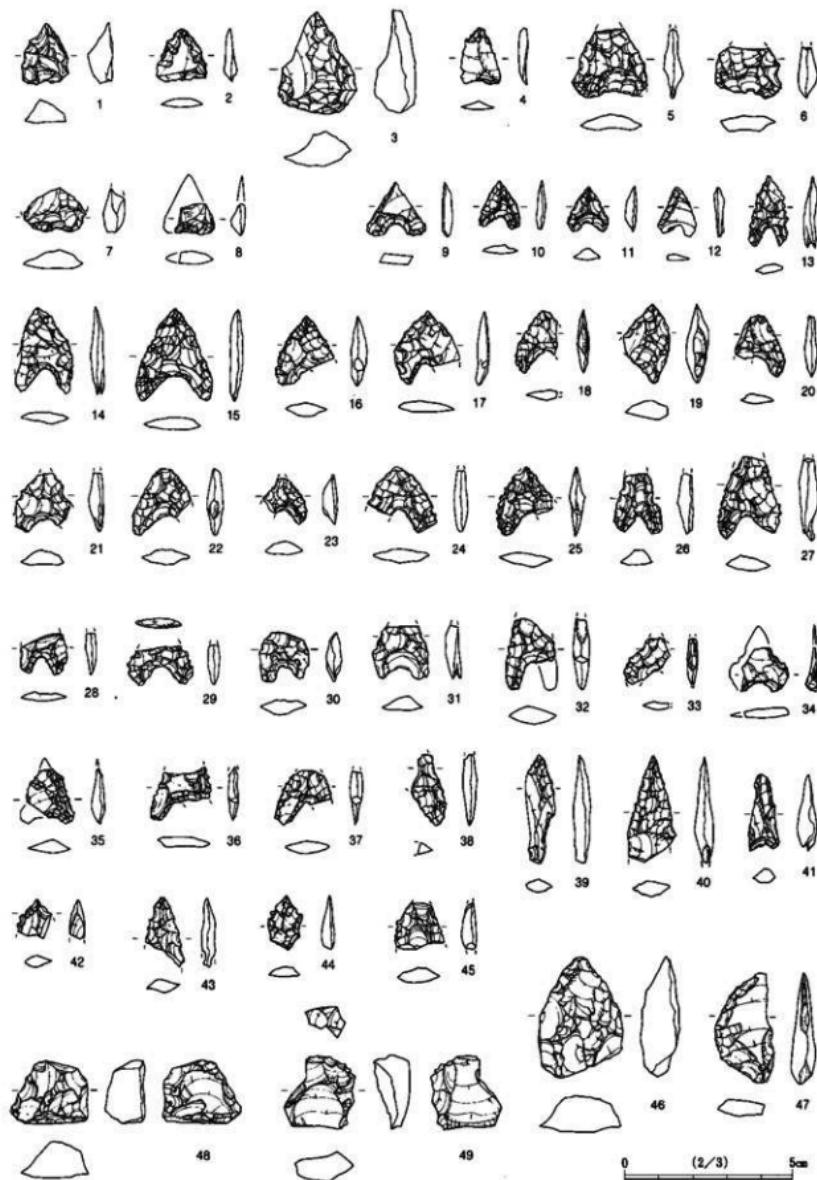


第38図 ピット群出土石器

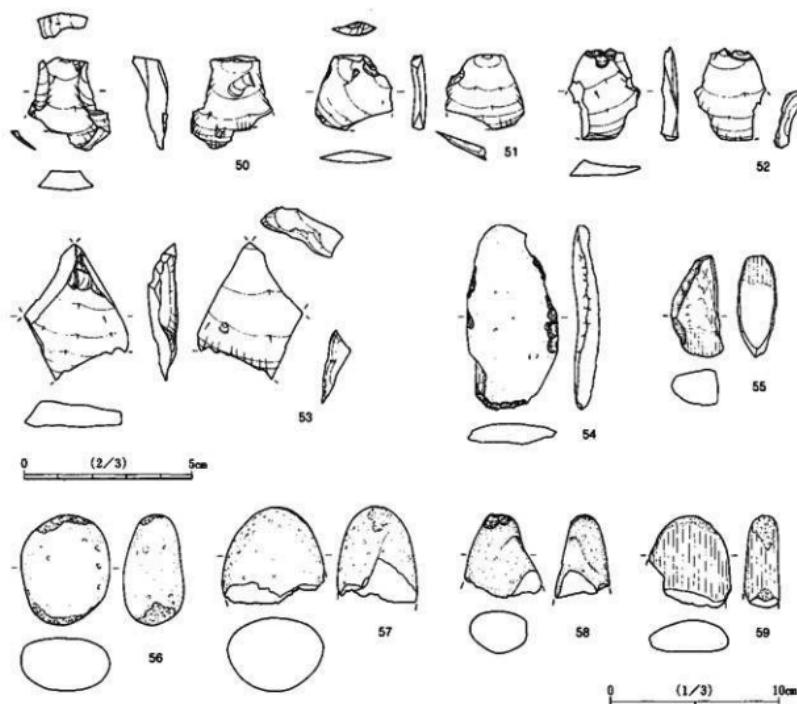
3 遺構外出土遺物 (第45~58図、第2~5表、図版13・18~28)

遺構外からも縄文土器、土製品、石器などが出土しており、グリッド出土の遺物として扱った。

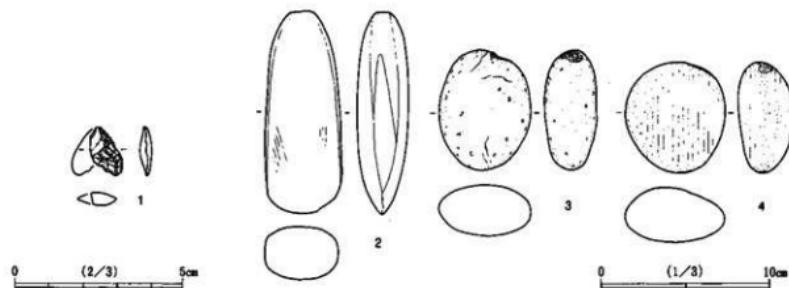
縄文土器は阿玉台式、勝坂式中期初頭から中葉にかけてのものが主体で、他にごく少量の早期と後期の縄文土器が発見されている。第45図に中期の比較的大型の土器を掲載した。第46図は早期の土器、第53図は後期の土器、第47~52図に中期の阿玉台式、勝坂式などの破片を掲載した。詳細は挿図、表、図版などを参照して頂くことにして、第45図4など、県内あるいは全国的にもほとんど類例のない資料が発見されている。



第39図 石器製作跡1群出土石器(1)



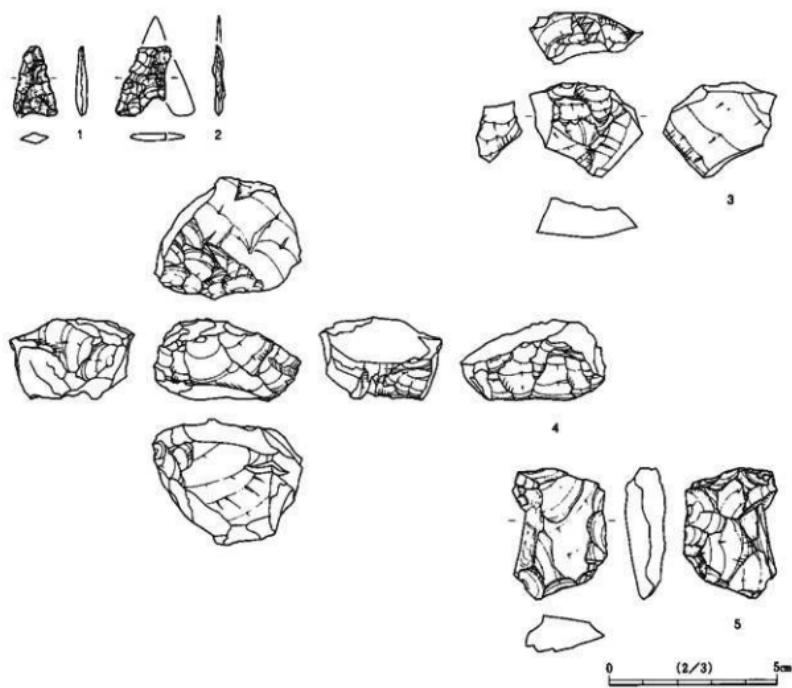
第40図 石器製作跡 1群出土石器 (2)



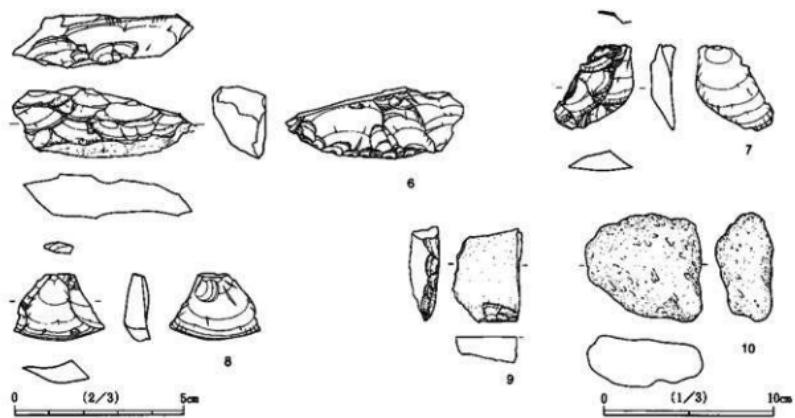
第41図 石器製作跡 2群出土石器



第42図 石器製作跡3群出土石器



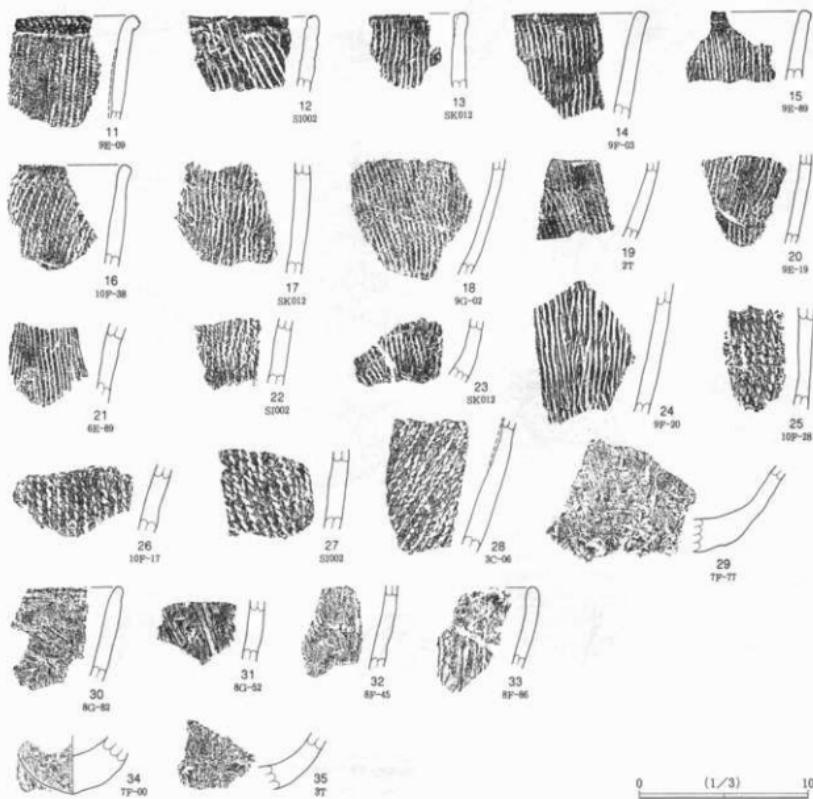
第43図 石器製作跡4群出土石器（1）



第44図 石器製作跡4群出土石器(2)



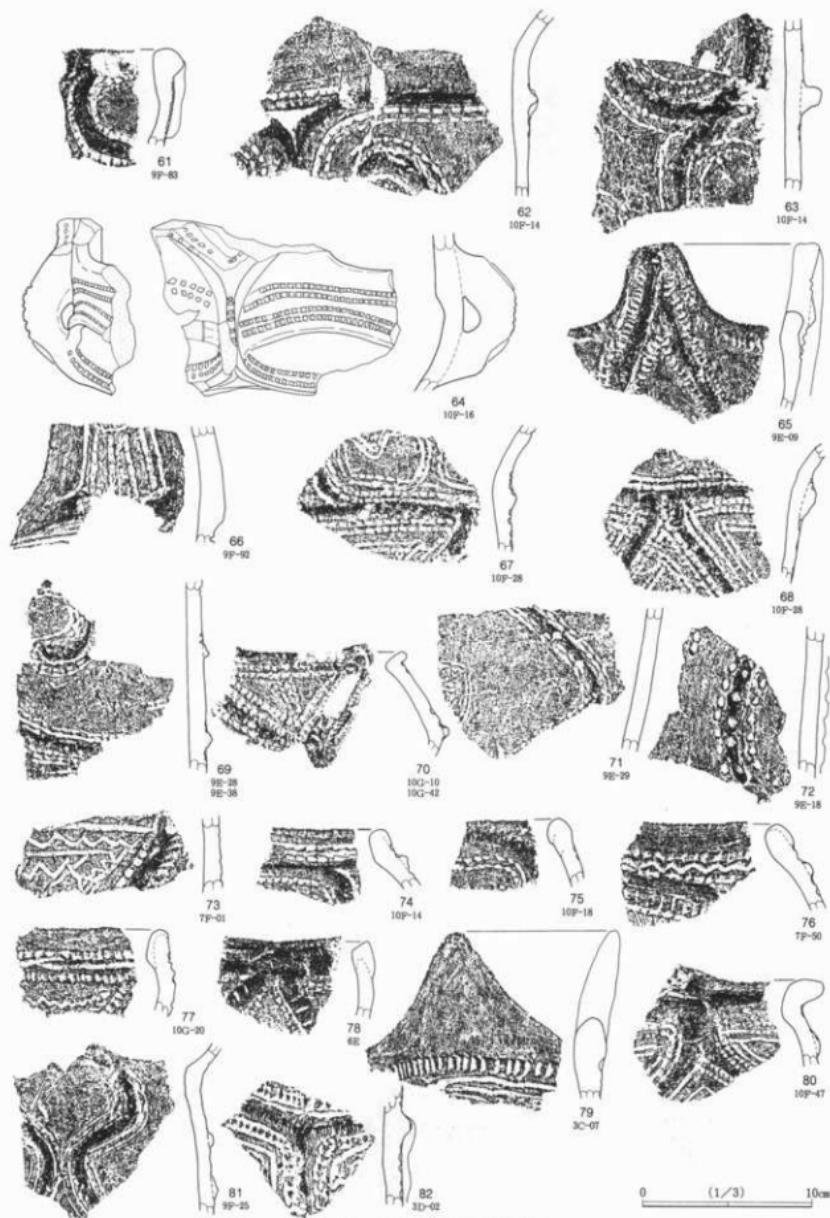
第45図 グリッド出土土器 (1)



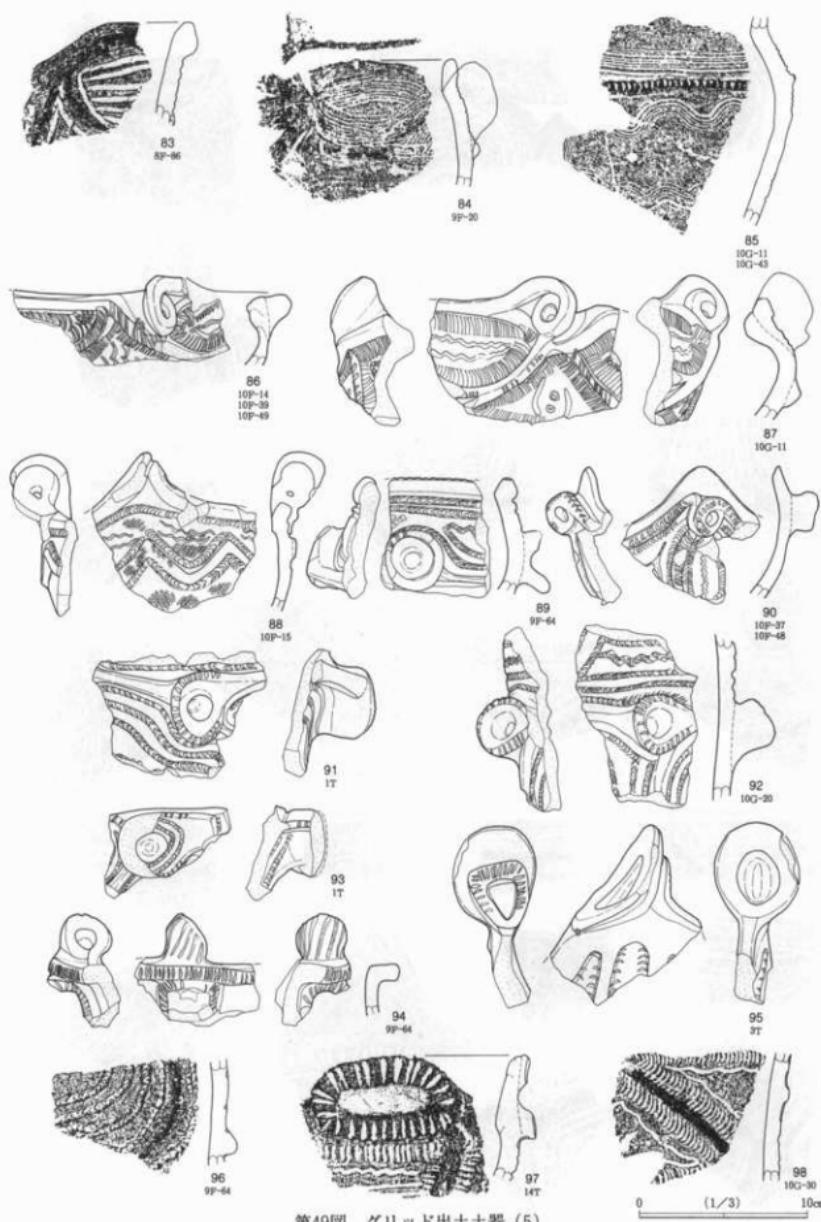
第46図 グリッド出土土器 (2)



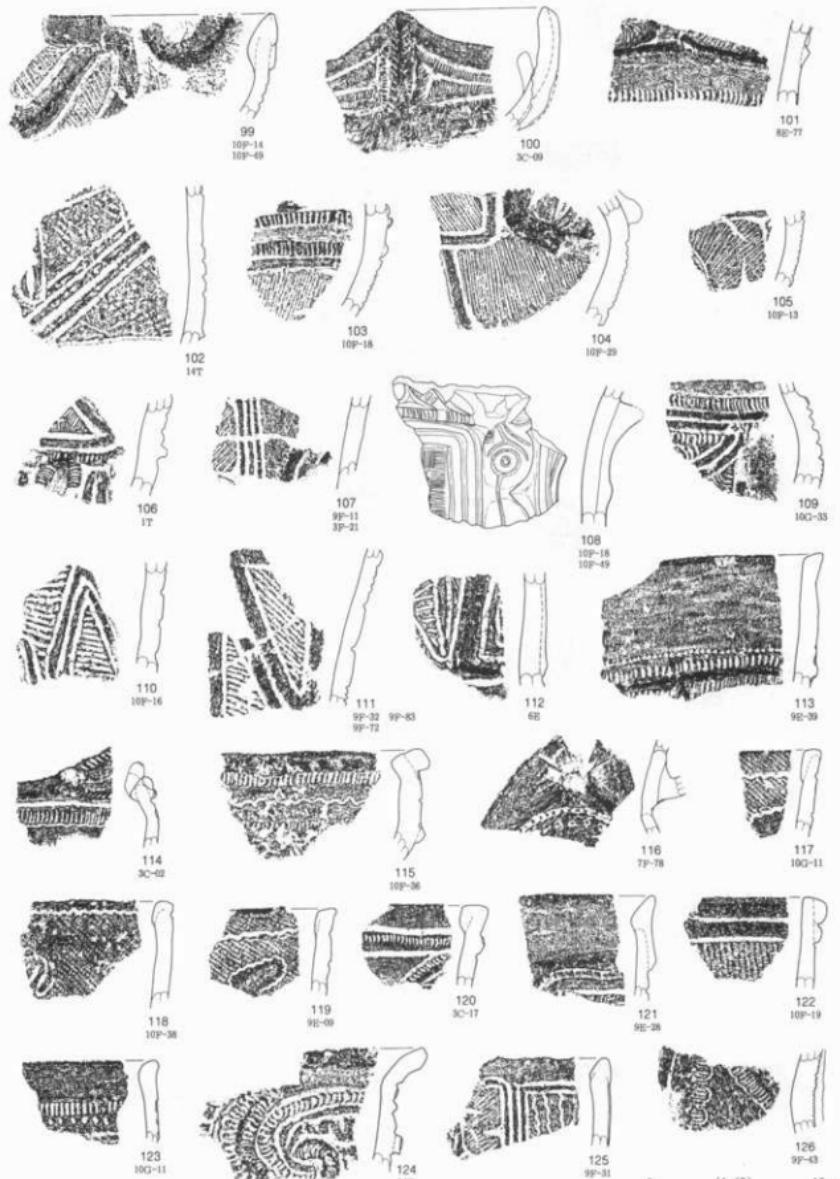
第47図 グリッド出土土器 (3)



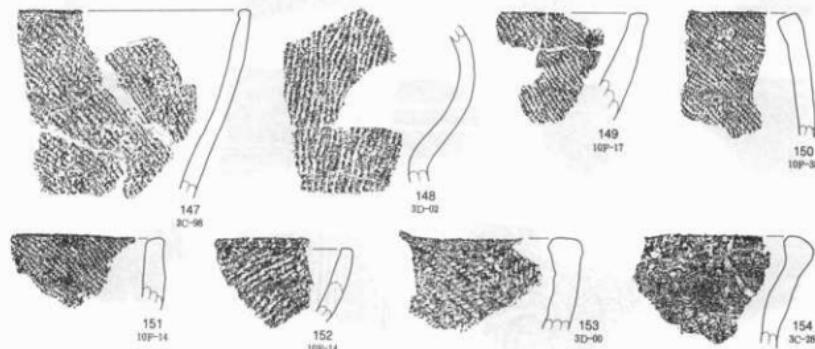
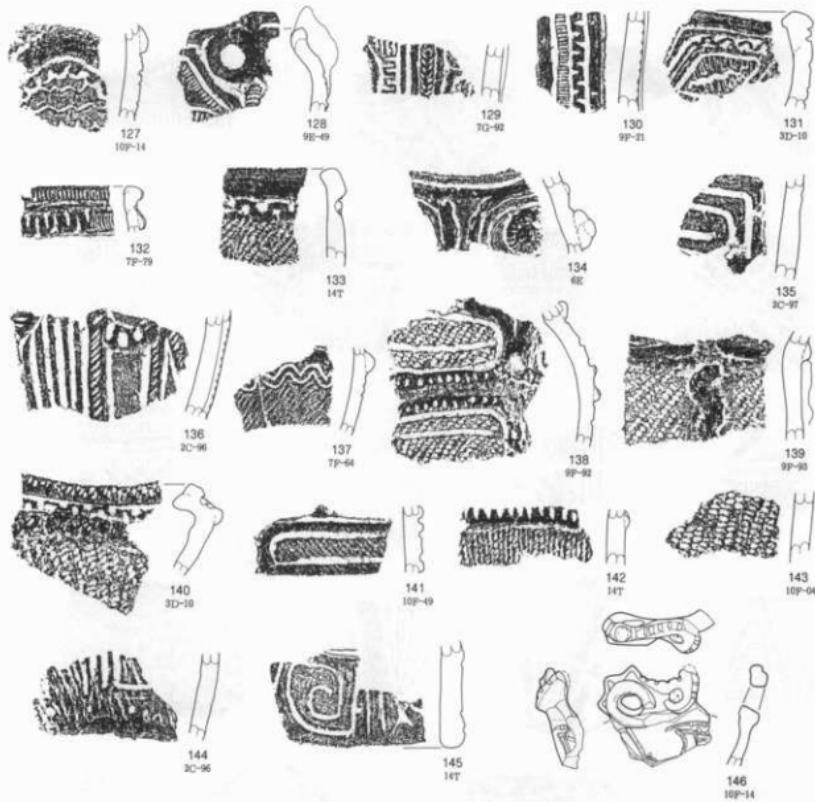
第48図 グリッド出土土器 (4)



第49図 グリッド出土土器 (5)

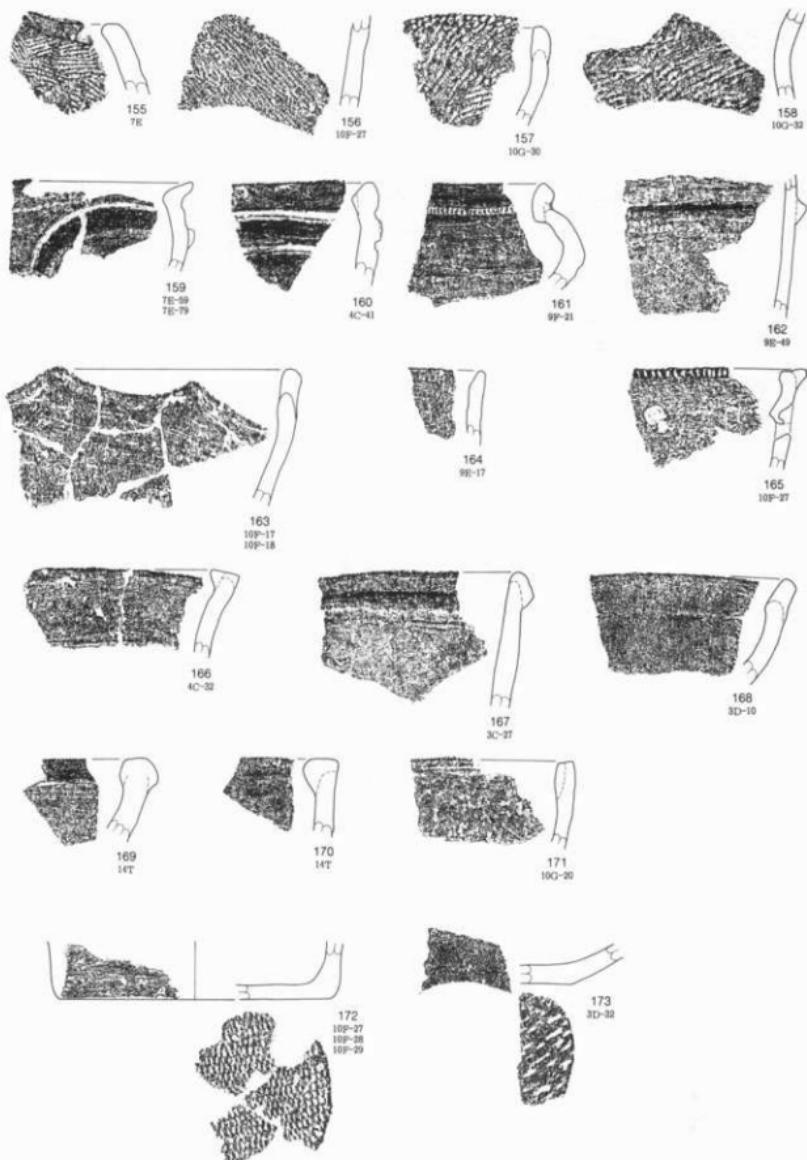


第50図 グリッド出土土器 (6)



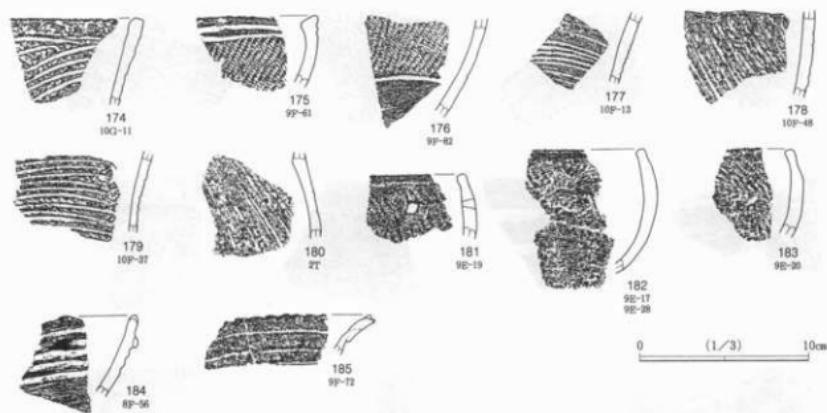
第51図 グリッド出土土器 (7)

0 (1/3) 10cm

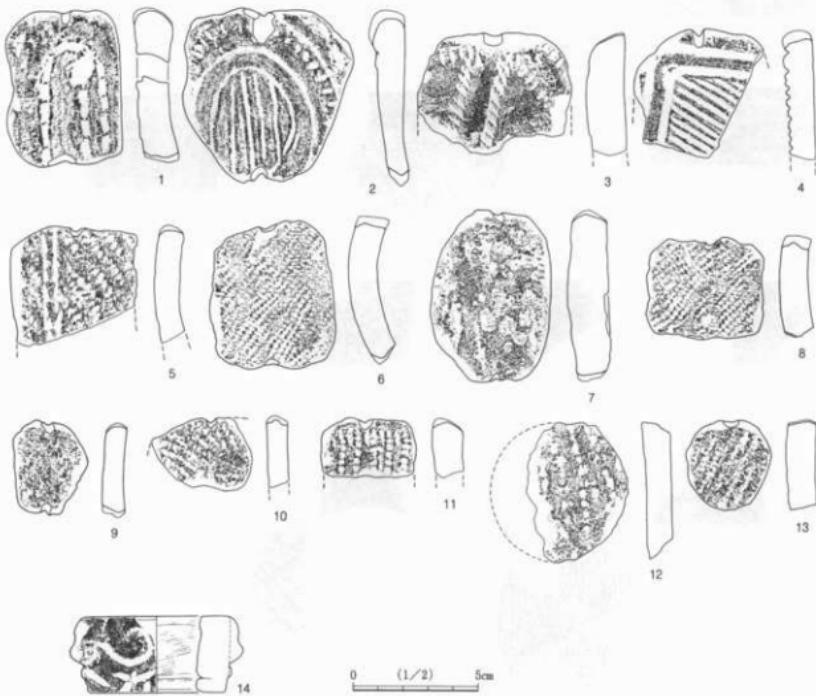


第52図 グリッド出土土器 (8)

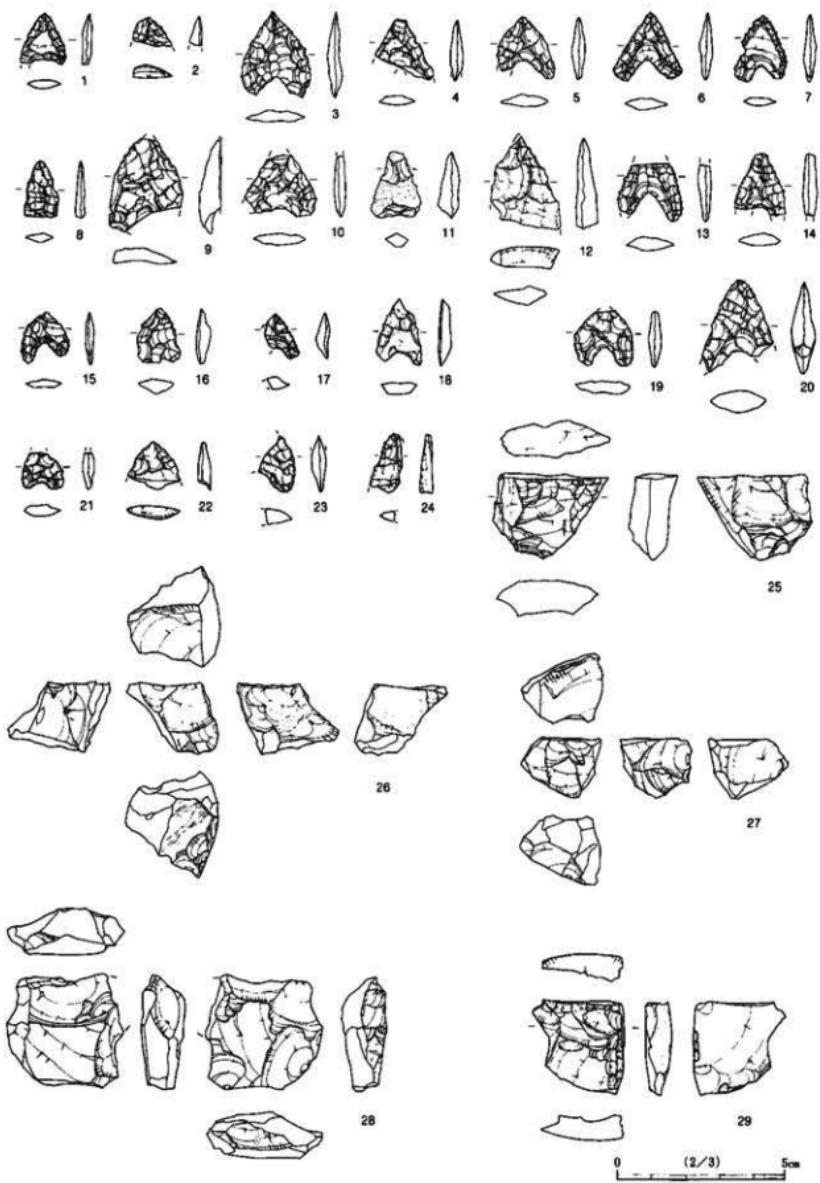
0 (1/3) 10cm



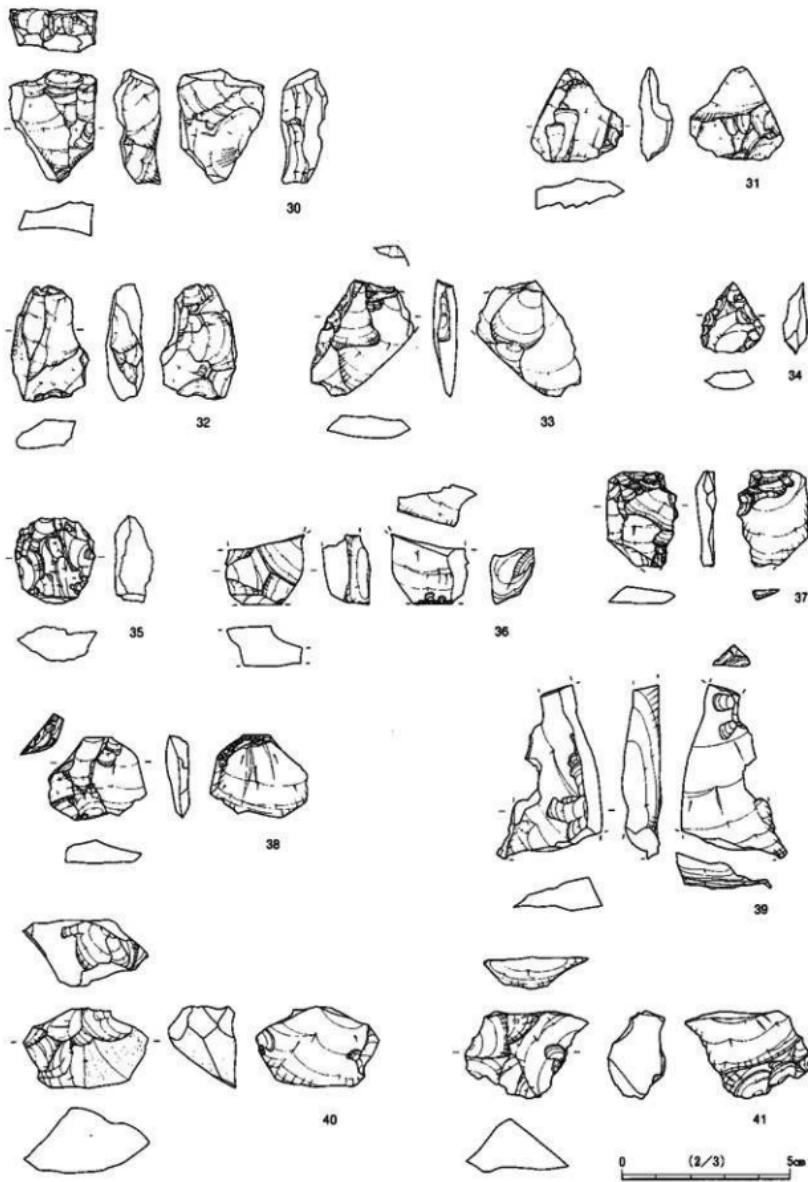
第53図 グリッド出土土器 (9)



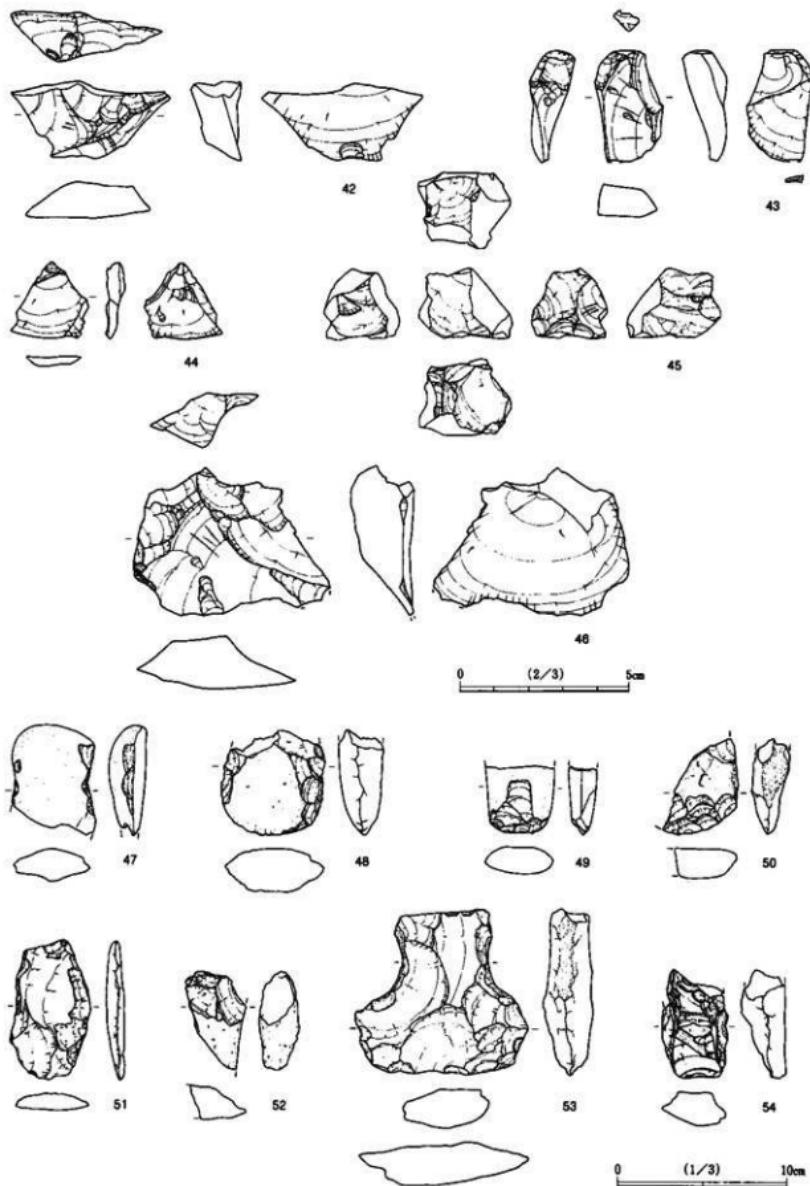
第54図 グリッド出土土製品



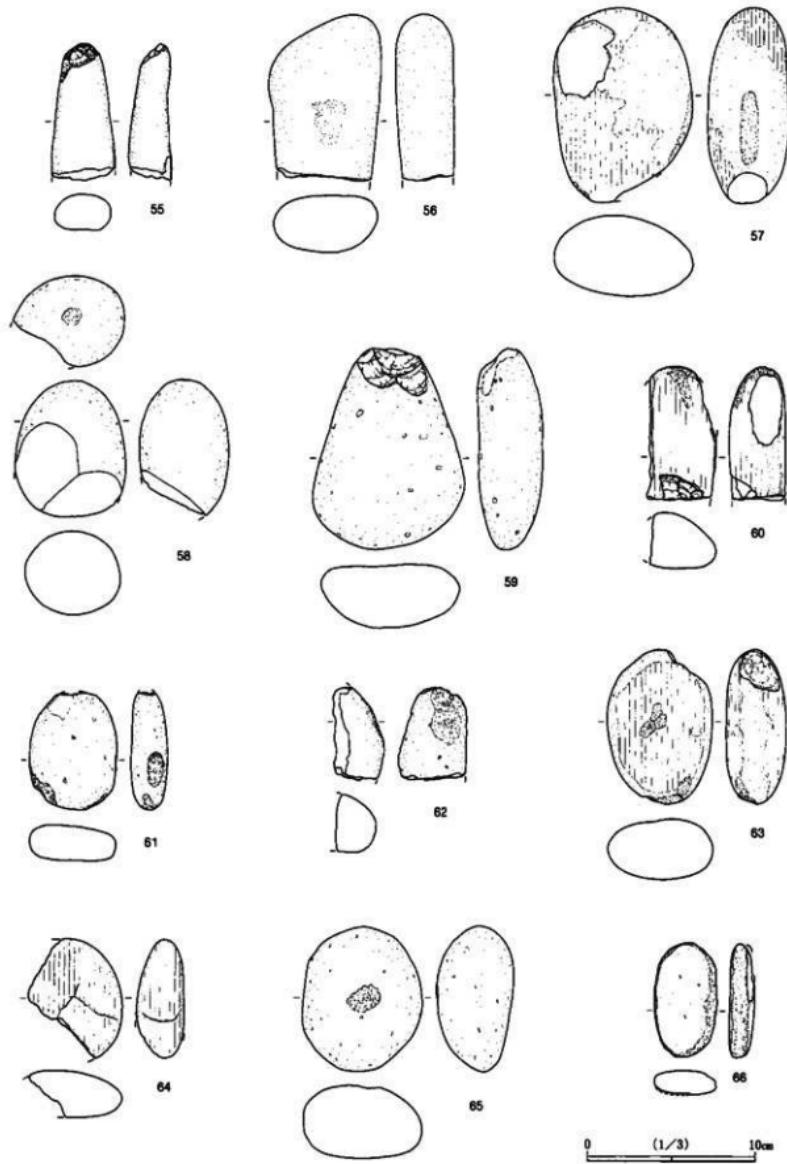
第55図 グリッド出土石器 (1)



第56図 グリッド出土石器 (2)



第57図 グリッド出土石器 (3)



第58図 グリッド出土石器 (4)

第2節 奈良時代以降

1 概要

今回の発掘調査では、検出された遺構・遺物の中心は縄文中期であるが、ほかに奈良時代の火葬墓、平安時代の竪穴住居跡2軒、中世の横列1条が、調査区の南側に混ざって散在している。

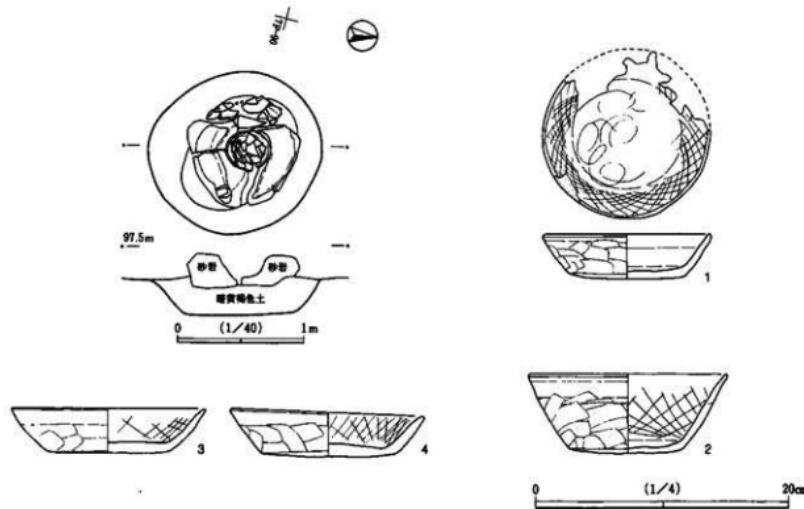
2 遺構・遺物

奈良時代

火葬墓

SK002 (第59図、第1表、図版10)

調査区南側、土坑SK005の北東4mほどの距離、7F-90に位置する。周溝は検出されなかったことから、石櫃単独埋葬施設と思われる。軟質砂岩の石櫃は外容器として円形に成形され、中央部が杯の大きさに掘りくぼめられている。1～4の土器類の杯を骨蔵器として使用したものと思われ、骨片が発見されている。調査時の所見では1、3、4は上、2は下とあるが、詳細は不明である。また、石櫃の上部は発見されていないが、表土除去の際に失われた可能性もある。1～4は杯で、体部外面はヘラケズリが施され、内面には斜格子状の暗文が見られる。8世紀第2四半期のものと思われる。



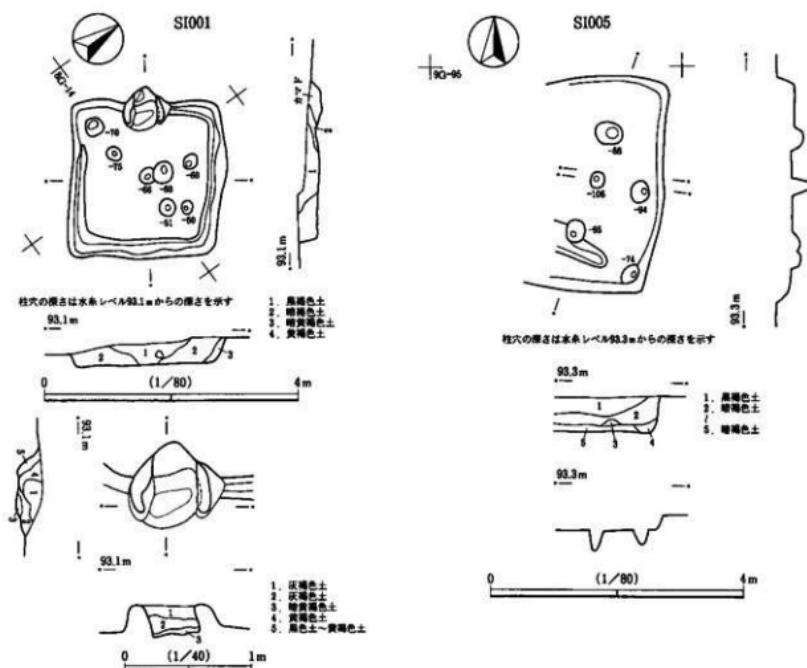
第59図 SK002・SK002出土土器

平安時代

竪穴住居跡

SI001 (第60図、第1表、図版11)

調査区南東端、竪穴住居跡SI002の北東側に近い、8G-15に位置する。平面形状は一辺が2.4mの方形を呈する。確認面からの掘り込みは、0.3mと比較的浅い。床面は平坦で、壁に沿って幅20cm、深さ5cmほどの周溝が一周し、壁はほぼ垂角に立ち上がる。カマドは北西側壁のほぼ中央に作られている。柱穴は合計7か所検出されているが、主柱穴と特定できるものがなく、詳細は不明である。数10点の縄文土器とともに6点の土師器片が出土しているが、図示できるものはなかった。



第60図 SI001・SI005

SI005 (第60図、第1表、図版11)

竪穴住居跡SI001から距離にしておよそ10mの、南側の調査区の東端、10G-06に位置する。西側を壊されているが、残された約半分から、平面形状は一辺が3.5mの方形を呈すると考えられる。確認面からの掘り込みは、0.2mと浅い。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。カマドおよび周溝は検出されていない。柱穴は5か所検出されたが、主柱穴と特定できるものではなく、詳細は不明である。また南側壁に近く、柱穴と重複して溝状のくぼみがあるが、詳細は不明である。数10点の縄文土器とともに8点の土師器片が出土しているが、図示できるものはなかった。

中世

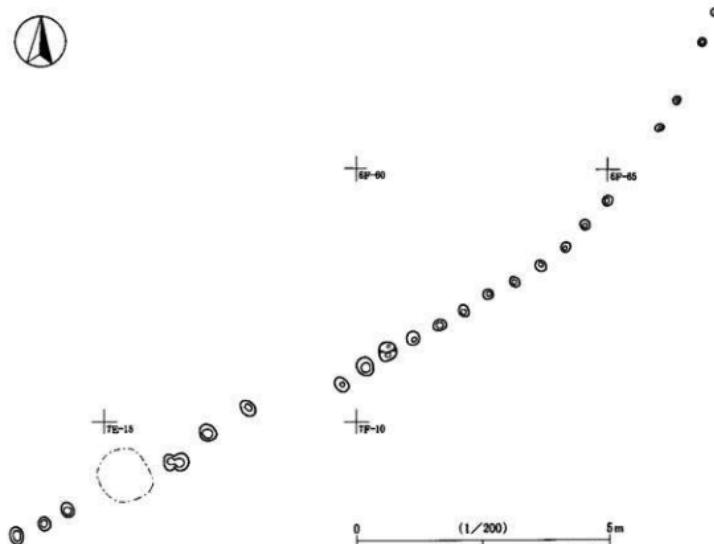
横列

SA001 (第61図、第1表、図版11)

調査区中央やや南側の、一部竪穴住居跡SI010と重複するグリッド6Fから7Eにかけて、22か所のピットが北東から南西にかけて検出された。ピットの大きさは直径が0.2m、深さが0.1m～0.2mとほぼ同じ大きさである。図示できるものはなかった。

その他

これまでに報告したもの以外に数点の弥生時代後期の土器、さらに近世の銭貨として新寛永1点が出土しているが、図示できるものはなかった。



第61図 SA001

第3表 土器片鍤観察表

No.	出土地点	遺構種類	時 期	長軸長cm	短軸長cm	長短比	重 量g	部 位	分 類	挿図番号	備 考
	SI-009	住居跡	中期	5.50	5.50	1.00	40.7	胴部	I b	20 - 13	
	SI-010	住居跡	中期	(2.95)	(4.70)	1.59	(12.5)	胴部	I a	24 - 23	
1	10F-38	グリッド	中期	6.10	4.50	0.74	45.0	口縁部	II c	54 - 1	穿孔あり
2	3C-16	グリッド	中期	(6.90)	(9.70)	1.41		胴部	I b	54 - 2	
3	10F-27	グリッド	中期	(4.80)	(6.10)	1.27	(45.5)	胴部	I c	54 - 3	
4	7E	グリッド	中期	(5.1)	(5.1)	1.00	(29.4)	胴部	I a	54 - 4	
5	7F-00	グリッド	中期	(4.7)	5.0	0.91	(29.5)	胴部	II c	54 - 5	
6	9F-61	グリッド	中期	5.90	4.90	0.83	41.9	胴部	II b	54 - 6	
7	14-T	トレンチ	中期	6.80	4.80	0.71	62.0	胴部	II a	54 - 7	
8	10F-27	グリッド	中期	4.00	4.70	1.18	28.0	胴部	II c	54 - 8	
9	10F-19	グリッド	中期	3.70	2.95	0.80	10.6	胴部	II b	54 - 9	
10	3-T	トレンチ	中期	(2.90)	(3.90)	1.34	(10.8)	胴部	III c	54 - 10	
11	10F-16	グリッド	中期	(2.35)	(3.80)	1.62	(14.1)	胴部	I a	54 - 11	
最 小	対 象			3.50	2.95		10.6				
最 大	対 象			(6.90)	(9.70)		63.2				
平 均	対 象			5.56	5.26		41.6				

※長軸長及び短軸長欄の（数字）は土器片鍤の一部が欠損しているので現存値を記した。また重量も同様である。

※長軸及び短軸の分類は、対の切り込みを結ぶ方向を長軸とし、それに直行する方向を短軸とした。

第4表 土製円盤観察表

No.	出土地点	遺構種類	時 期	長軸長cm	短軸長cm	重 量g	部 位	挿図番号	備 考
1	10F-38	グリッド	中期	5.50	(4.00)	(24.4)	胴部	54 - 12	
2	14T	トレンチ	中期	3.5	3.4	16.3	胴部	54 - 13	

第3章 まとめ

第1節 縄文時代

発掘調査の成果は縄文早期の陥穴1基、中期前半の竪穴住居跡8軒、小竪穴2基、土坑5基、ピット群4か所、石錐製作跡4か所などが検出され、関連する遺物が出土した。縄文早期の遺構は陥穴1基のみであるが、撚糸文系の土器などが少量確認されている。この早期の陥穴を除けば、他のほとんどは縄文中期前半の時期を中心とする。土器型式で言えば阿玉台式、および勝坂式と若干の加曾利E式の中期初頭から中葉にかけての期間に集落が営まれたと考えられる。

なお、練木遺跡採集の土器および黒曜石の原産地推定について、大村 裕氏、建石 徹氏によって詳細な分析がなされている¹⁾。

第2節 奈良時代以降

奈良時代の遺構として、石櫃単独埋葬施設の火葬墓が検出されている。石櫃は外容器で、骨蔵器は土師器の杯2点と考えられる。時期は8世紀第2四半期と思われる。方形区画を伴わない最も古い例かもしれない。なお、未報告であるが、練木遺跡の北西側では平成12年度に、練木遺跡と同じく館山道建設に伴う調査で、木更津市南羽鳥遺跡、君津市篠ヶ作遺跡で石櫃等を伴う火葬墓が発見されている。

また、本県の火葬墓については半澤幹雄氏²⁾、渡邊昭宏氏³⁾による紹介がある。

ほかに、奈良時代以降の遺構としては平安時代の竪穴住居2軒、中世の横列1条が検出されている。

注1 大村 裕 2002 「二つの「顔」を持った土器 一千葉県君津市練木遺跡出土中期縄紋土器の研究ー」「土曜考古 第26号」 土曜考古学研究会

建石 徹 2002 「練木遺跡採集中期縄文土器の胎土分析ならびに黒曜石の原産地推定 ー大村論文のコメントをかねてー」「土曜考古 第26号」 土曜考古学研究会

注2 半澤幹雄 1996 『市原市武士遺跡1』 (財)千葉県文化財センター

注3 渡邊昭宏 2000 『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書5』 (財)千葉県文化財センター

写 真 図 版



練木遺跡周辺航空写真（昭和42年撮影）



1. 練木遺跡全景（北から）



2. 練木遺跡全景（南から）



1. 第1トレンチ（東北東から）



2. 第2トレンチ（北から）



3. 第3トレンチ（南から）



4. 第4トレンチ（南南西から）



1. 第13トレンチ（南西から）



2. 第14トレンチ（南西から）



3. 第17トレンチ（南から）



4. 第22トレンチ（東から）



1. 第18 レンチ遺構検出状況（西から）



3. 8 G クリット遺構検出状況 2（北から）



2. 8 G クリット遺構検出状況 1（北から）



4. 基本土層（8 F - 19クリット西壁）

1. SI 002 (南西から)



2. SI 003 (北から)



3. SI 004 (東から)



1. SI 006 (北から)



2. SI 007 (北東から)



3. SI 009 (南西から)





1. SI 010 (東から)



2. SI 011 (南から)

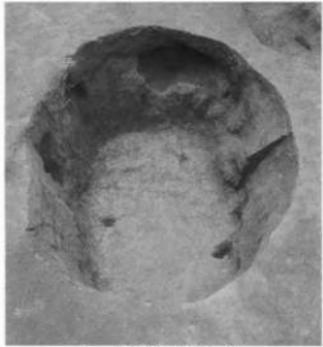


3. 9F-00~10G-00グリッド遺物出土状況 (南西から)

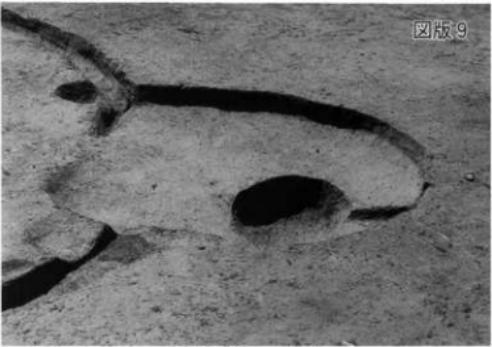


4. 10G-00グリッド遺物出土状況 (西から)





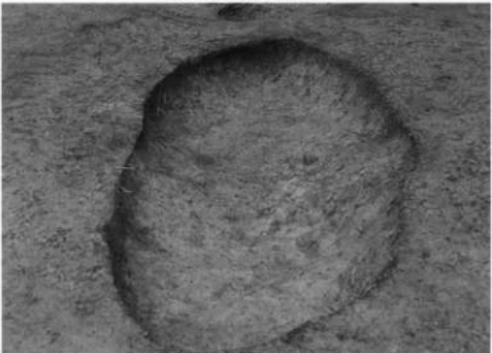
1. SK003 (北から)



2. SK004 (北から)



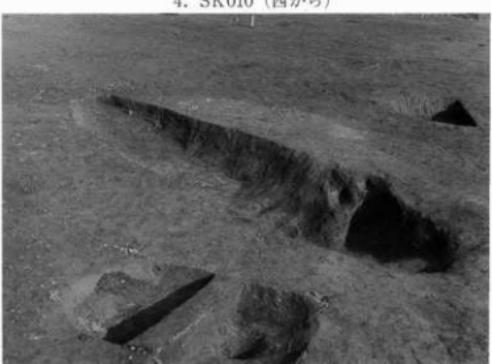
3. SK007 (北東から)



4. SK010 (西から)



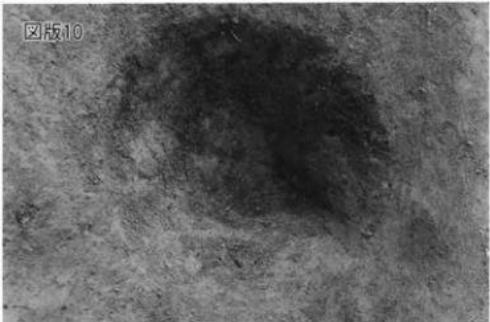
5. SK011 (北から)



6. SK012 (西から)

7. SK013 (北東から)

8. SK013遺物出土状況1
(北東から)9. SK013遺物出土状況2
(南東から)



1. SH121 (東から)



2. 7F-68グリッド埋甕 (西から)



3. SK002 (1) 東から



4. SK002 (2) 東から



5. 出土土器 (1)



6. 出土土器 (2)



7. 出土土器 (3)



8. 出土土器 (8)

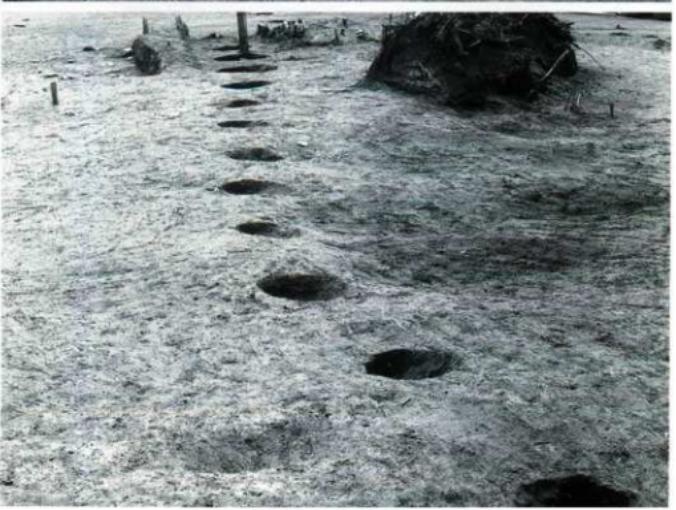
1. SI 005 (西から)

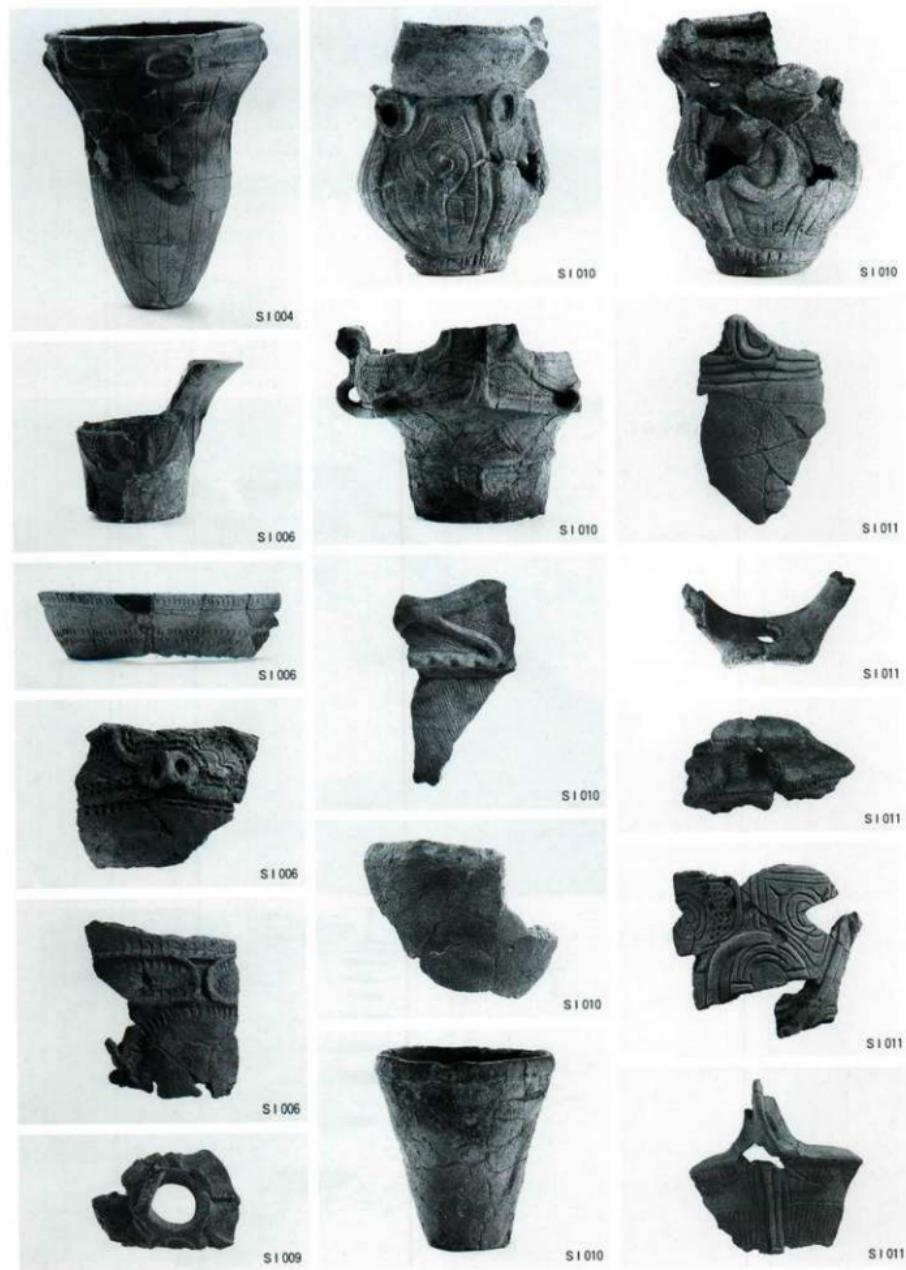


2. SI 001 (南東から)



3. SA 001 (南東から)







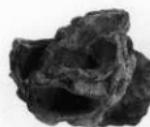
SK013



SK013



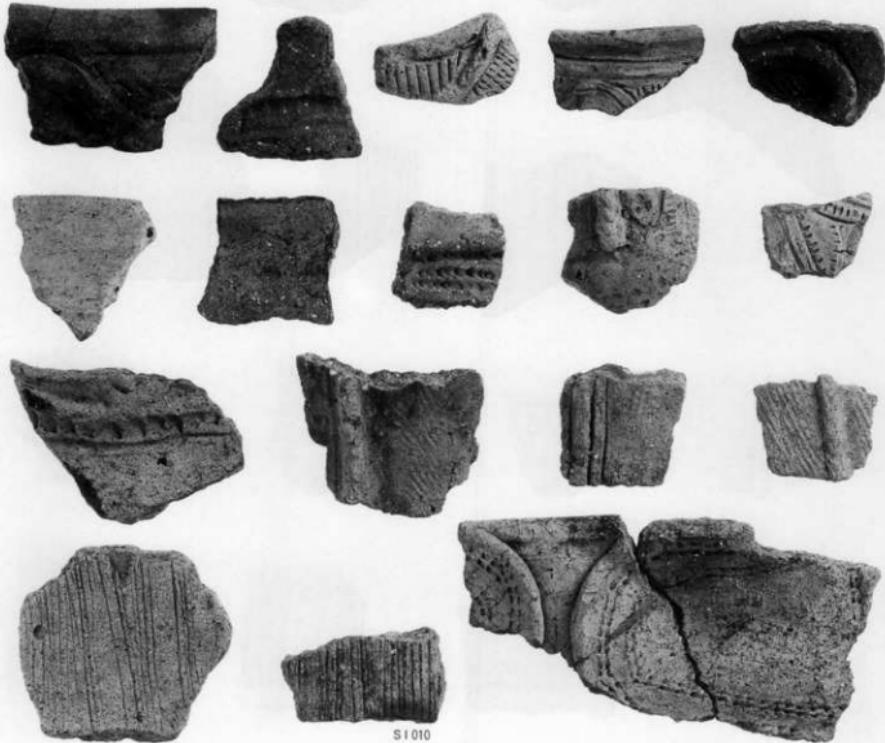
SH121



遺構出土土器（2）・グリッド出土土器（1）



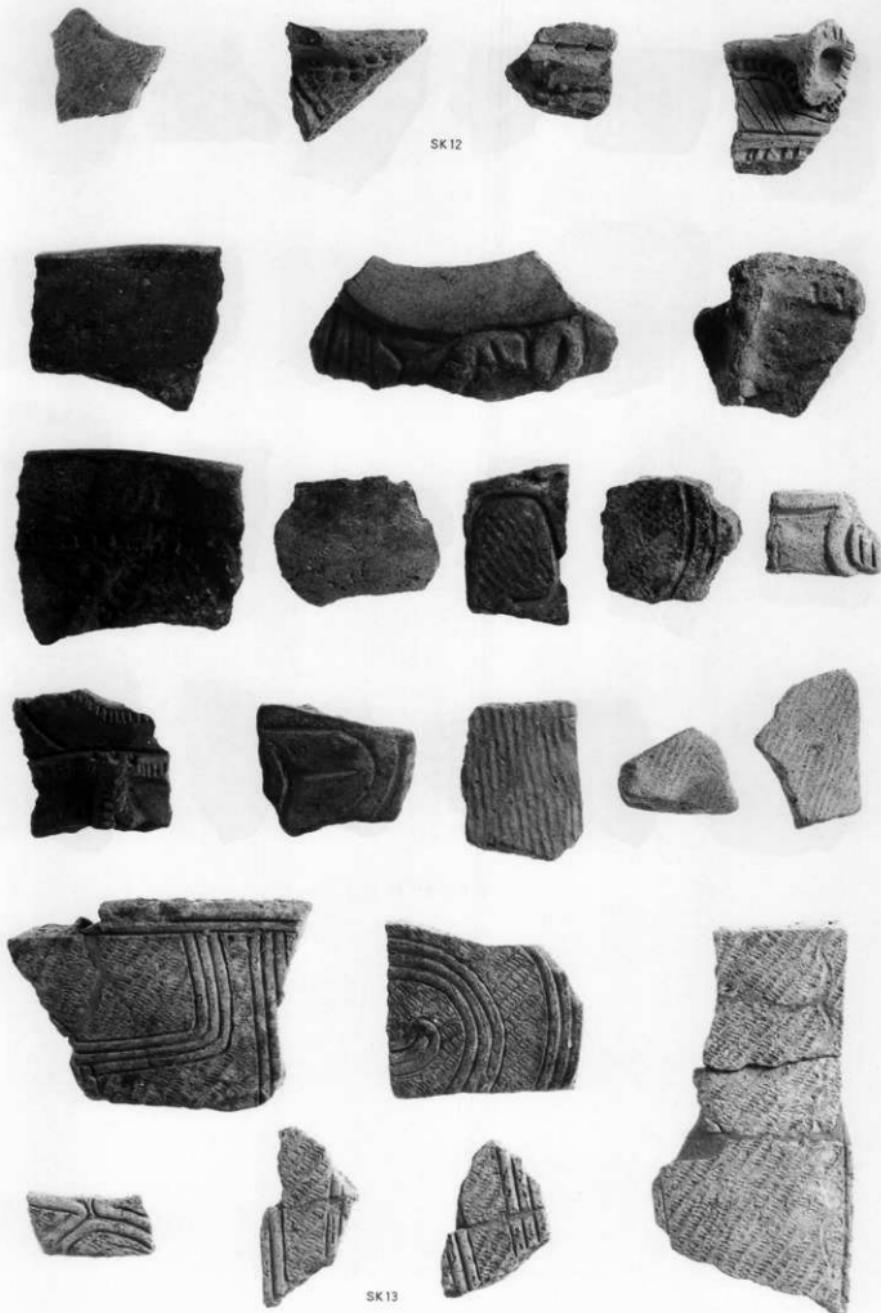
遺構出土土器（3）



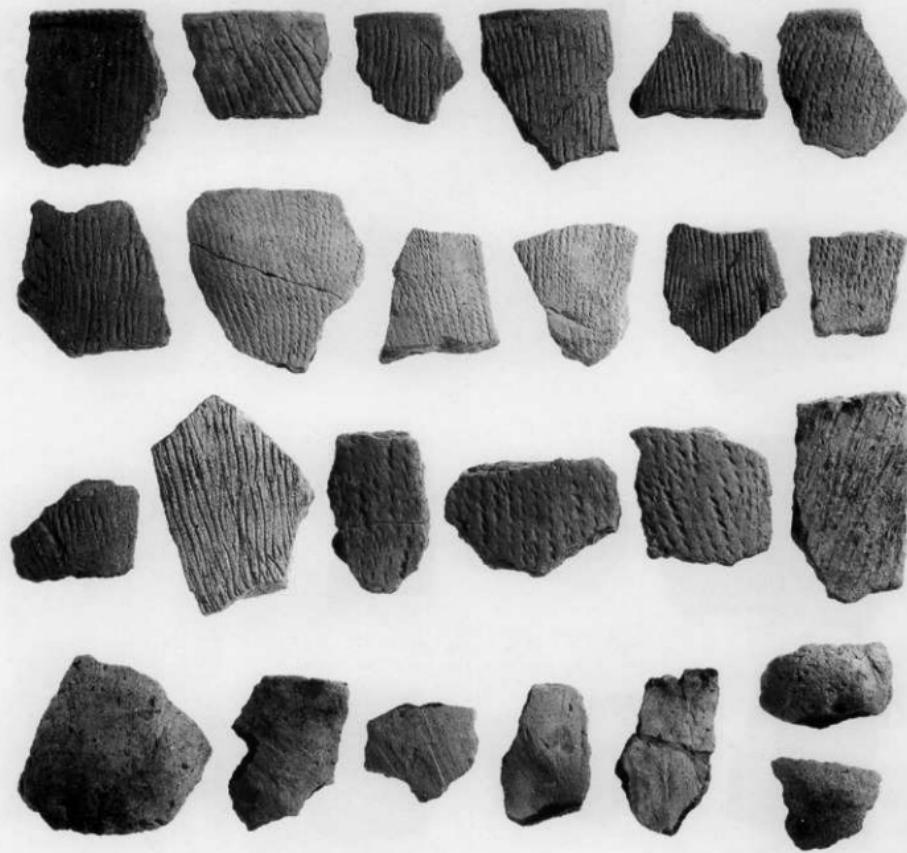
遺構出土土器（4）



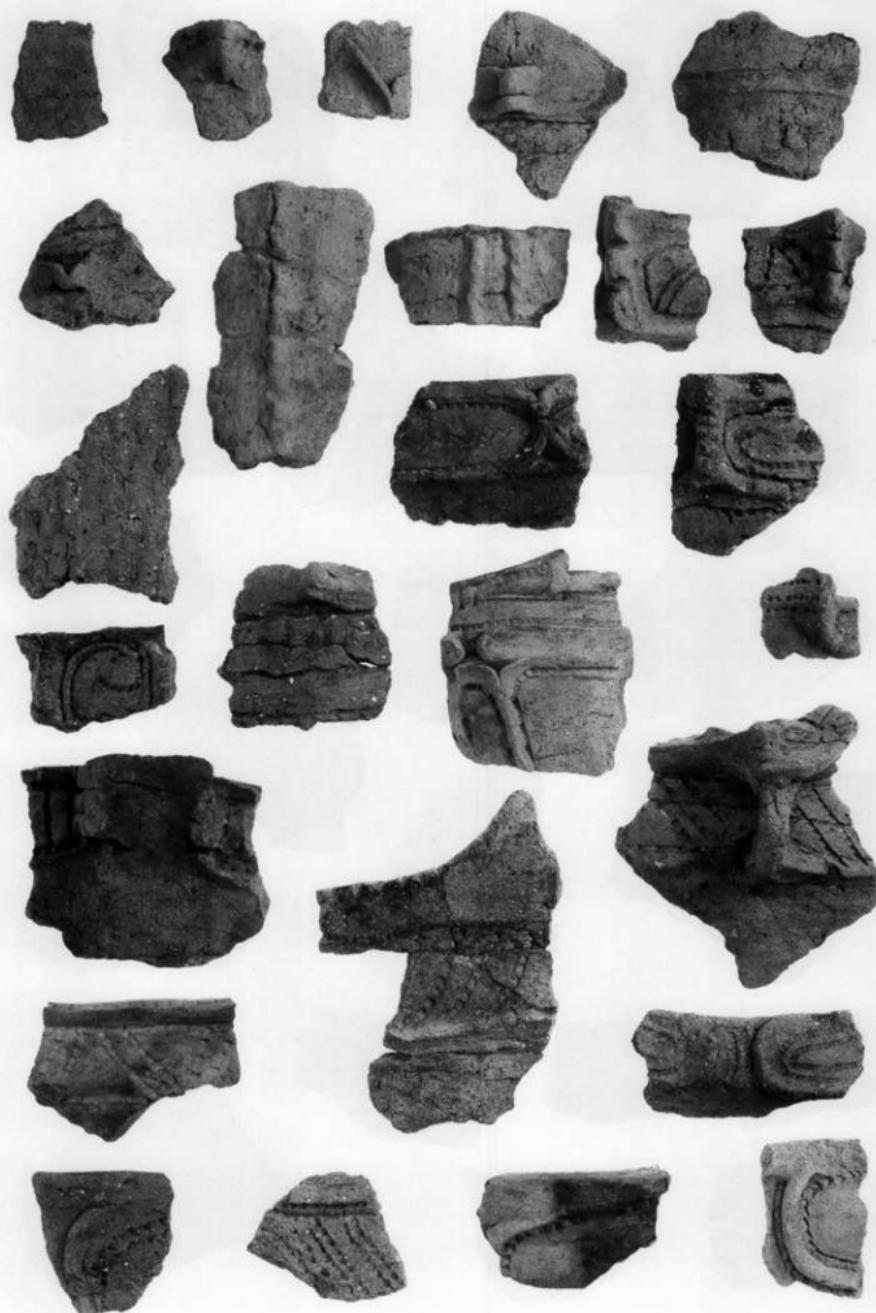
遺構出土土器（5）



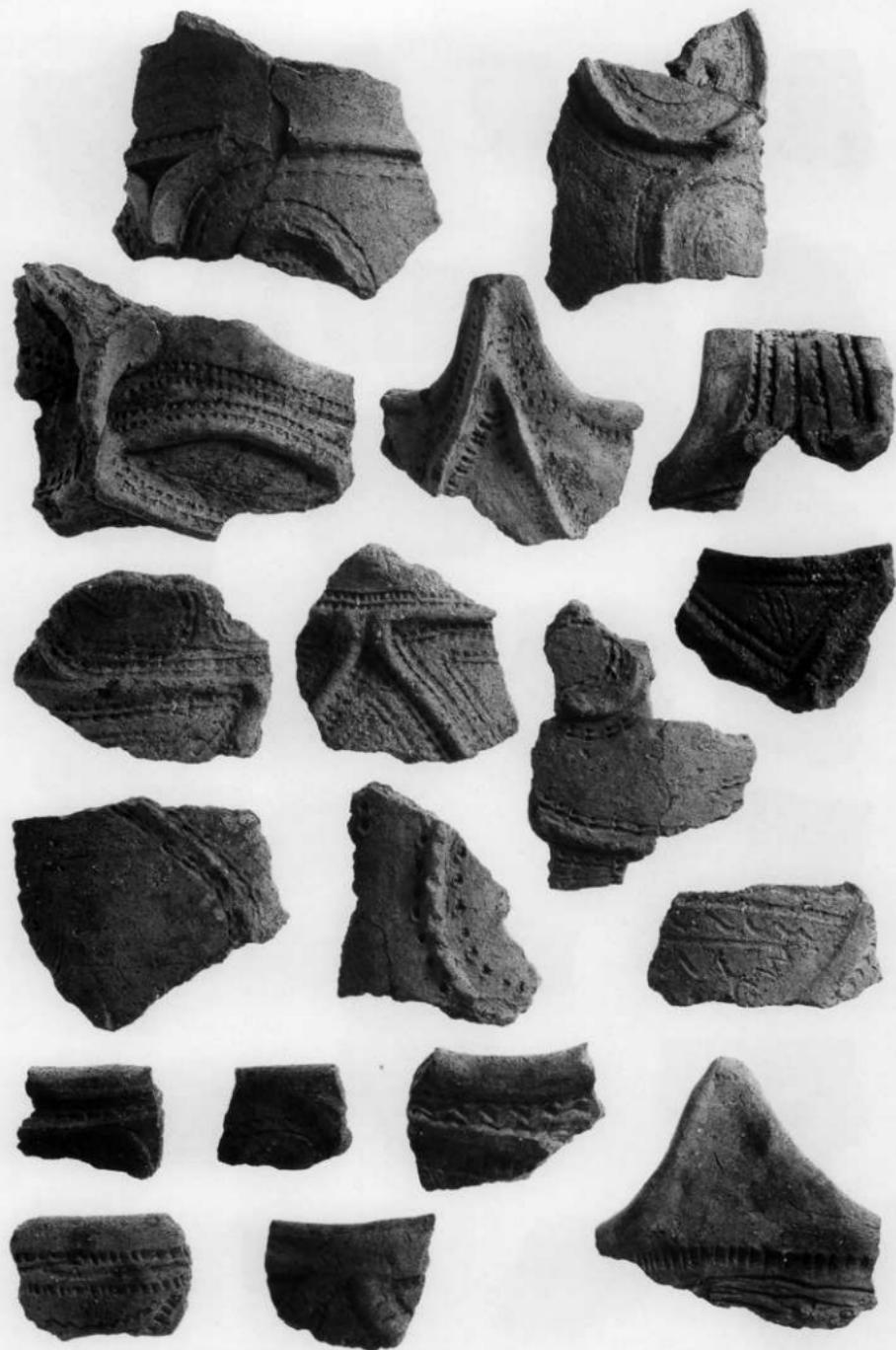
遺構出土土器（6）



グリッド出土土器（2）



グリッド出土土器（3）



グリッド出土土器（4）



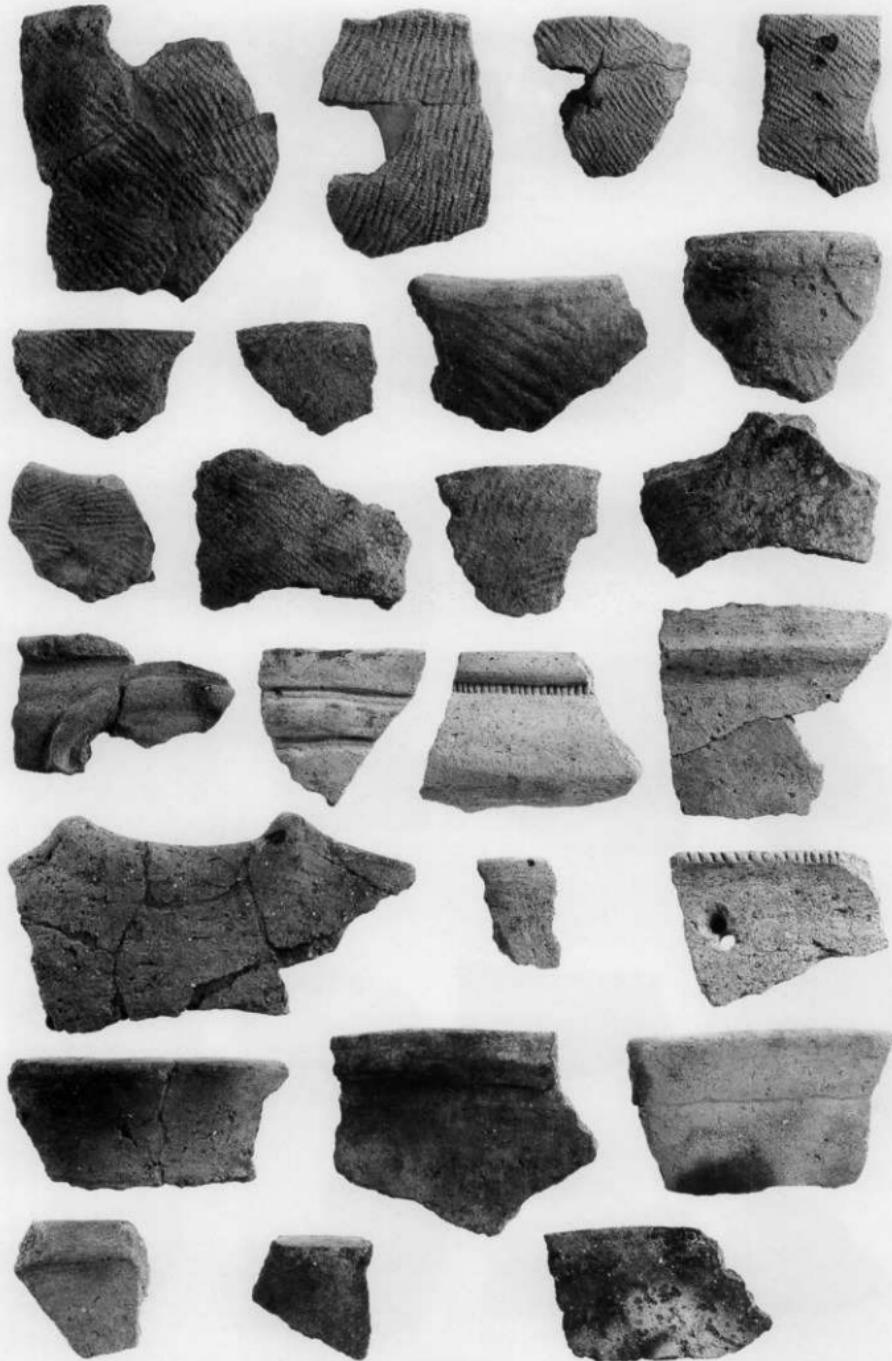
グリッド出土土器（5）



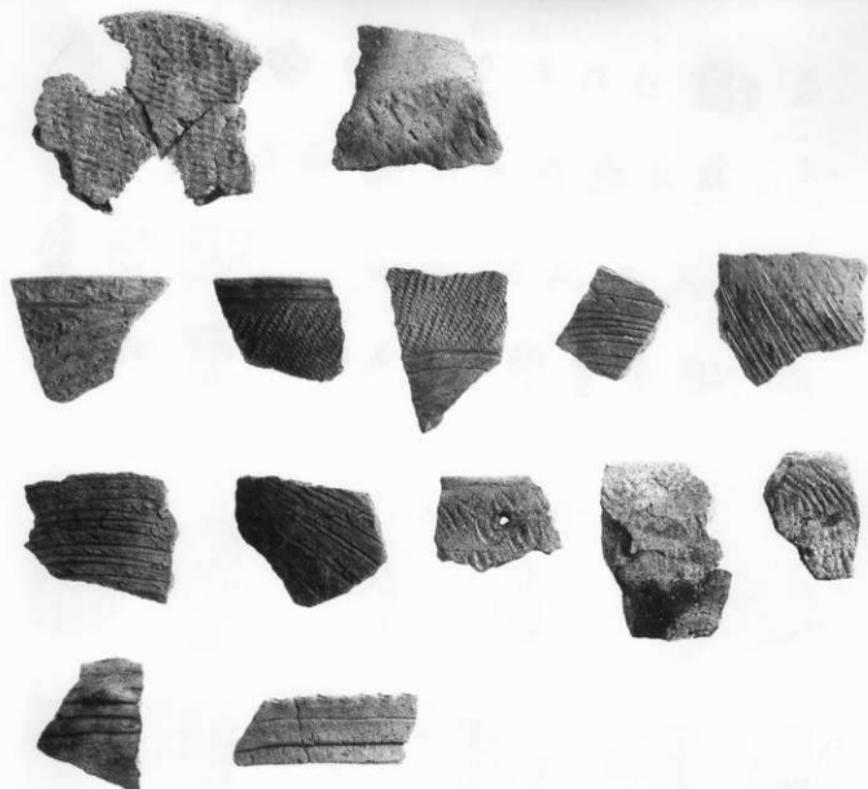
グリッド出土土器（6）



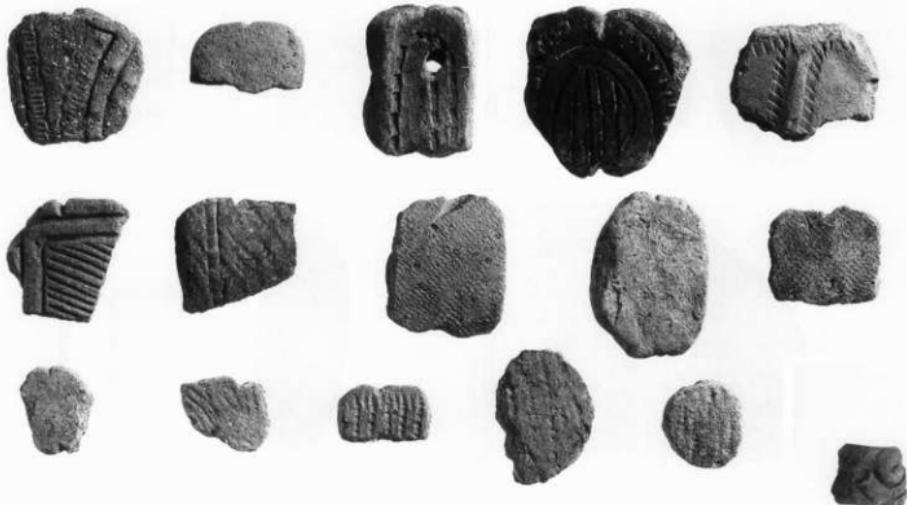
グリッド出土土器（7）



グリッド出土土器（8）

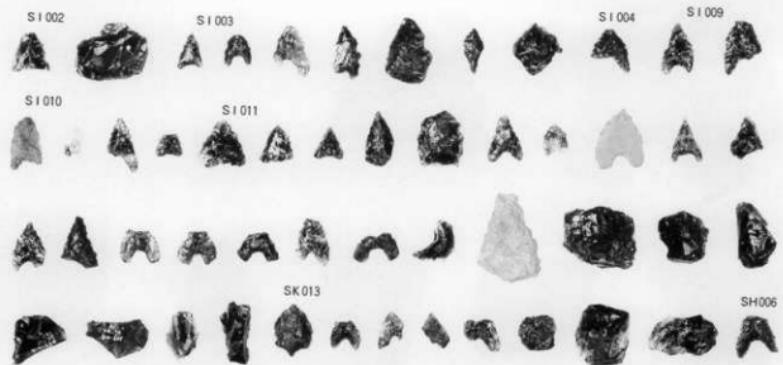


グリッド出土土器 (9)

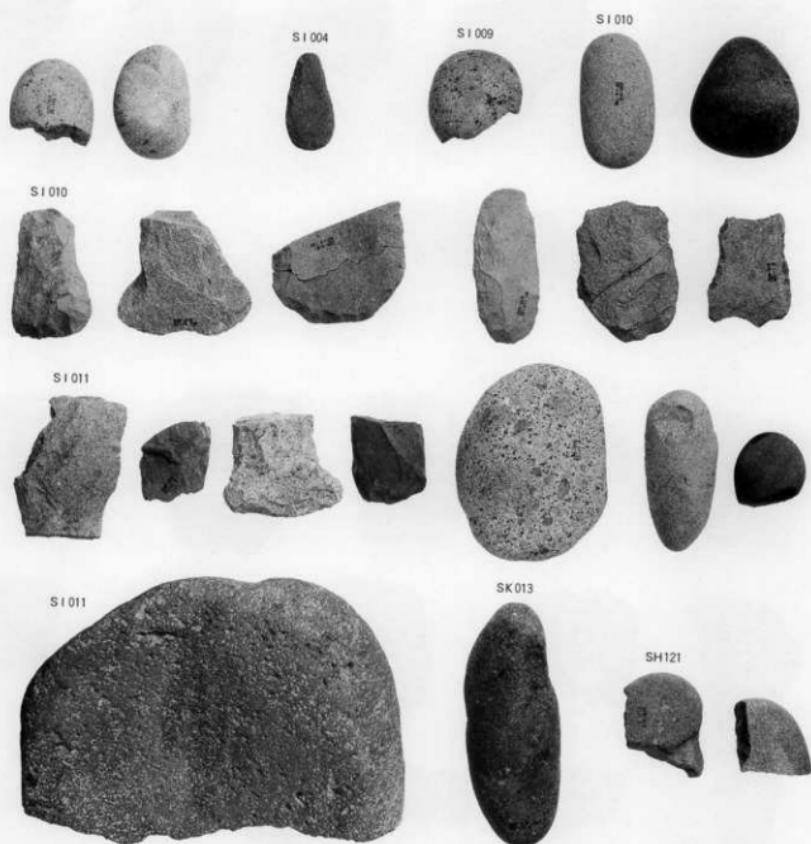


遺構・グリッド出土土製品

図版26



遺構出土剥片石器



遺構出土礫石器

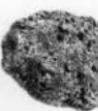
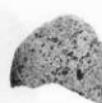


石鋸製作跡出土剝片石器

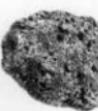
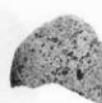
1群



2群



3群



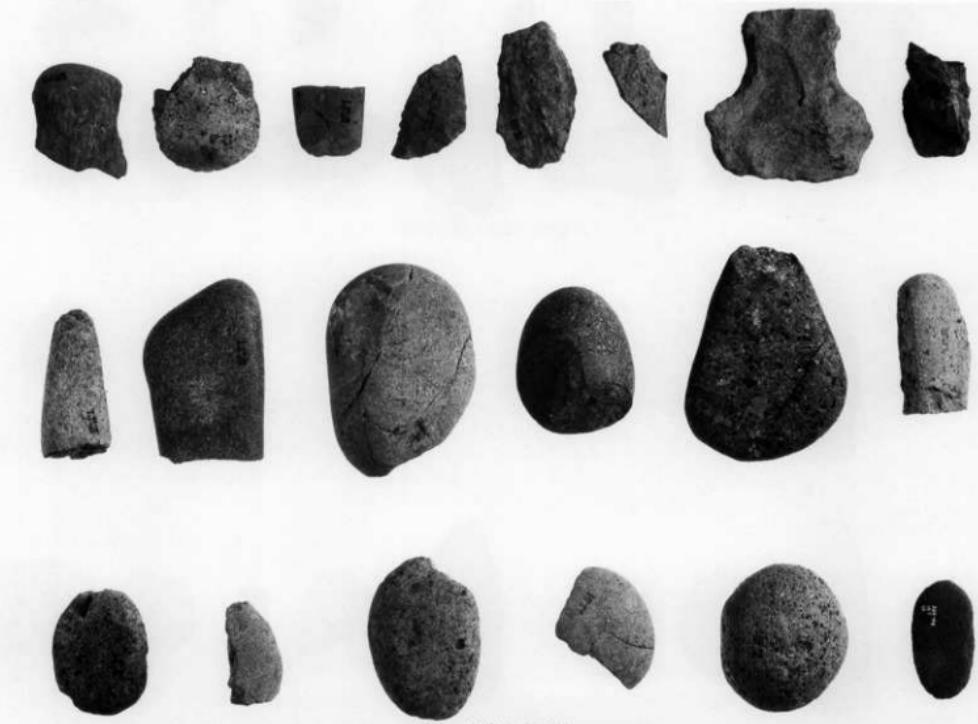
4群



石鋸製作跡出土裸石器



グリッド出土剥片石器



グリッド出土砾石器

報告書抄録

ふりがな	ひがしかんとうじどうしゃどう（きさらづ・ふつつせん）まいぞうぶんかざいちょうさほうこうくしょ
書名	東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告書
副書名	君津市練木遺跡
卷次	1
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第460集
編著者名	高橋博文、田島新、半澤幹雄
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL. 043(422)8811
発行年月日	西暦2003年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
練木遺跡	千葉県君津市練木	225	018	35度 19分 38秒	139度 56分 57秒	2000.05.08 / 2000.09.29	9,200m ²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
練木遺跡	集落跡 包蔵地	縄文時代	竪穴住居跡	8軒	縄文土器・石器・礪		阿玉台式、勝坂式を主体とする縄文時代中期前業の集落と石器の製作跡が検出された。 奈良時代の火葬墓からは8世紀中半の土師器とともに石櫃が発見された。	
			小空穴	2基				
	墓域 集落跡	奈良時代 平安時代 中・近世	土坑	5基				
			石器集中地点	4か所				
			ピット群	4か所	土師器			
			火葬墓	1基				
			竪穴住居跡	2軒	銭貨			
			横列	1条				

千葉県文化財センター調査報告第460集
東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告書1
－君津市練木遺跡－

平成15年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
発 行 日 本 道 路 公 団
東京都港区虎ノ門1-18-1
財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2
印 刷 大和美術印刷株式会社
千葉県木更津市潮浜2-1-10